

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2018年1月1日
(第4期)	至	2018年12月31日

株式会社日本創発グループ

東京都台東区上野三丁目24番6号

(E30930)

目次

頁

表紙

第一部	企業情報	1
第1	企業の概況	1
1.	主要な経営指標等の推移	1
2.	沿革	3
3.	事業の内容	5
4.	関係会社の状況	6
5.	従業員の状況	8
第2	事業の状況	9
1.	経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	9
2.	事業等のリスク	11
3.	経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	12
4.	経営上の重要な契約等	15
5.	研究開発活動	15
第3	設備の状況	16
1.	設備投資等の概要	16
2.	主要な設備の状況	16
3.	設備の新設、除却等の計画	17
第4	提出会社の状況	18
1.	株式等の状況	18
2.	自己株式の取得等の状況	20
3.	配当政策	22
4.	株価の推移	22
5.	役員の状況	23
6.	コーポレート・ガバナンスの状況等	25
第5	経理の状況	32
1.	連結財務諸表等	33
2.	財務諸表等	72
第6	提出会社の株式事務の概要	81
第7	提出会社の参考情報	82
1.	提出会社の親会社等の情報	82
2.	その他の参考情報	82
第二部	提出会社の保証会社等の情報	83

監査報告書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年3月29日
【事業年度】	第4期（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）
【会社名】	株式会社日本創発グループ
【英訳名】	JAPAN Creative Platform Group Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 藤田 一郎
【本店の所在の場所】	東京都台東区上野三丁目24番6号
【電話番号】	03(5817)3061
【事務連絡者氏名】	取締役管理本部長 菊地 克二
【最寄りの連絡場所】	東京都台東区上野三丁目24番6号
【電話番号】	03(5817)3061
【事務連絡者氏名】	取締役管理本部長 菊地 克二
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第1期	第2期	第3期	第4期
決算年月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
売上高 (百万円)	32,848	33,290	36,393	51,145
経常利益 (百万円)	32	1,024	1,298	1,234
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失 (△)	△428	528	1,251	△959
包括利益 (百万円)	△461	522	1,488	△1,142
純資産額 (百万円)	9,329	9,090	12,674	10,973
総資産額 (百万円)	30,786	28,978	50,645	50,102
1株当たり純資産額 (円)	787.82	821.24	922.01	792.23
1株当たり当期純利益又は1株当たり 当期純損失 (△) (円)	△36.89	46.38	110.34	△75.38
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	30.0	31.0	25.0	19.8
自己資本利益率 (%)	—	5.8	11.6	—
株価収益率 (倍)	—	13.84	8.16	—
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	1,484	4,147	2,629	2,282
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△856	△866	△11,560	△1,924
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△1,234	△4,247	12,866	△1,497
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	3,564	2,598	6,663	5,550
従業員数 (人)	1,542	1,610	2,162	2,451

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第1期及び第4期の自己資本利益率、株価収益率については、親会社株主に帰属する当期純損失を計上しているため記載しておりません。

4. 当社は2015年1月5日に単独株式移転により東京リスマチック株式会社の完全親会社として設立いたしましたので、2014年12月期に係る記載はしておりません。

5. 第1期連結会計年度の連結財務諸表は、単独株式移転により完全子会社となった東京リスマチック株式会社の連結財務諸表を引き継いで作成しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期
決算年月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
売上高 (百万円)	854	1,153	1,825	1,727
経常利益 (百万円)	389	644	593	297
当期純利益又は当期純損失(△) (百万円)	758	149	850	△776
資本金 (百万円)	400	400	400	400
発行済株式総数 (株)	12,187,280	12,187,280	13,817,934	13,817,934
純資産額 (百万円)	8,200	7,578	10,647	8,249
総資産額 (百万円)	14,303	20,466	42,802	44,268
1株当たり純資産額 (円)	699.78	692.85	776.22	659.46
1株当たり配当額 (円)	24.00	24.00	24.00	24.00
(内1株当たり中間配当額) (円)	(18.00)	(18.00)	(18.00)	(18.00)
1株当たり当期純利益又は1株当たり 当期純損失(△) (円)	65.21	13.15	75.01	△60.96
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	57.3	37.0	24.9	18.6
自己資本利益率 (%)	9.2	1.9	9.3	—
株価収益率 (倍)	8.99	48.82	12.00	—
配当性向 (%)	36.80	182.51	62.00	—
従業員数 (人)	31	32	39	51

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 当社は四半期配当制度を導入しております。1株当たり配当額(内1株当たり中間配当額)には第1四半期及び第3四半期における1株当たり配当額を含んでおります。

4. 当社は2015年1月5日に単独株式移転により東京リスマチック株式会社の完全親会社として設立いたしましたので、2014年12月期に係る記載はしておりません。

5. 第4期の自己資本利益率、株価収益率、配当性向は当期純損失を計上しているため記載しておりません。

2 【沿革】

年月	沿革
2015年1月	東京リスマチック㈱が単独株式移転の方法により当社を設立し、当社株式は東京証券取引所市場JASDAQ（スタンダード）に上場）
2015年2月	東京リスマチック㈱は2014年12月に上場廃止
2015年4月	2015年2月13日付で東京リスマチック㈱の関係会社管理事業を会社分割（吸収分割）の方法により当社が承継する吸収分割契約を締結
2015年7月	東京リスマチック㈱の関係会社管理事業を会社分割（吸収分割）の方法により承継する
2016年7月	㈱サカモトを株式取得により子会社とする
2016年9月	㈱ソニックジャムを株式取得により子会社とする
2016年10月	クラウドゲート㈱を株式交換により子会社とする
2017年1月	㈱コロレを株式取得により子会社とする
2017年1月	㈱FIVESTARinteractiveを株式取得により子会社とする
2017年7月	㈱ダンホールディングスを株式取得により子会社としたことに伴い、同社の子会社ダンサイエンス㈱他6社を子会社とする。なお、2017年3月31日を効力発生とし、㈱ダンホールディングスを吸収合併
2017年7月	㈱あみューズを株式取得により子会社とする
2017年7月	宏和樹脂工業㈱を株式取得により子会社とする
2017年7月	㈱エヌビー社を株式取得により子会社とする
2017年10月	㈱P l a y c eを株式取得により子会社とする
2017年10月	㈱ハル工房、㈱イーストグラフィックスを株式取得により子会社とする
2017年10月	グラフィックグループ㈱を株式取得により子会社としたことに伴い、同社の子会社日経印刷㈱、日経土地㈱を子会社とする。なお、2017年12月31日を効力発生とし、グラフィックグループ㈱を吸収合併
2018年4月	カタオカプロセス㈱を株式取得により子会社とする
2018年6月	田中産業㈱を第三者割当増資引受により子会社としたことに伴い、同社の子会社㈱M G Sを子会社とする

また、第1期（2015年12月期）に子会社となった東京リスマチック株式会社の沿革は以下のとおりであります。

（参考 東京リスマチック株式会社の株式移転までの沿革）

年月	沿革
1972年11月	印刷物のオフセット製版を目的として東京都中央区にて、東京リスマチック㈱を設立
1980年12月	東京都板橋区に独ハイデル社製A全印刷機5台を導入し、印刷業務を開始
1982年3月	東京都中央区に独ローランド社製A全両面機を導入し、印刷業務を拡充
1984年12月	東京都豊島区にライノトロンシステムを導入し、電子組版業務を開始
1986年3月	東京都江東区に森下工場を開設。印刷業務の統合による印刷事業の確立
1986年4月	東京都千代田区に写研出力センターを開設し、写研出力業務を開始
1987年8月	大阪市西区に写研出力センターを開設し、関西地区への進出を図る
1992年9月	東京都新宿区にD T P出力サービス等のサービスビューロー事業を開始
1995年12月	東京都中央区にオンデマンド印刷機を導入し、オンデマンド事業を開始
1996年2月	東京都千代田区にWindows D T Pを実用化する目的でWindows事業を開始
1996年8月	都内のサービスビューロー事業部においてインターネットによるデータ入稿サービスを開始
1996年11月	定款を一部変更し、製版業からサービス業とし、デジタル化に適應する企業体を標榜する
1997年3月	東京都新宿区に高性能プロッターを導入し、サイン・ディスプレイ事業を開始
1997年4月	東京都荒川区に校正機を導入し、プルーフ事業を開始
1998年5月	500円額面株式1株を50円額面株式10株に分割するとともに、1,000株を1単位とする単位株制度を採用
1998年7月	日本証券業協会に株式を店頭登録
2000年5月	本社（管理部門）を東京都板橋区から東京都荒川区東日暮里6-41-8に移設
2000年5月	1単位の株式数を1,000株から100株に変更
2002年3月	第一製版㈱を株式取得により子会社とする
2002年9月	東京都板橋区舟渡に西台工場を開設
2003年12月	大阪西センター・大阪北センターを閉鎖
2004年6月	プライバシーマーク（個人情報保護システム）の認証（適用範囲：全社）を取得
2004年12月	㈱ジャスダック証券取引所に株式を上場
2005年2月	ISO14001 環境マネジメントシステムの認証（適用範囲：全社）を取得
2005年9月	東京都板橋区舟渡に舟渡工場並びにサインディスプレイスタジオ板橋を開設
2006年10月	株式1株につき2株の株式分割を実施
2007年1月	羽陽美術印刷㈱を株式取得により子会社とする
2007年8月	㈱サンエーを株式取得により子会社とする
2008年3月	ミナト印刷紙工㈱を株式取得により子会社とする
2008年6月	㈱プレシーズを株式取得により子会社とする
2008年12月	有限会社T K Oを吸収合併
2008年12月	カガク印刷㈱を株式取得により子会社とする

年月	沿革
2009年 6 月	(株)プレシーズ（連結子会社）が、(株)アクセスを株式取得後吸収合併
2009年 7 月	第一製版(株)（連結子会社）を吸収合併
2009年10月	(株)タイヨーグラフィックを株式取得により子会社とする
2009年10月	(株)キャドセンターを株式取得により子会社とする
2010年 2 月	東京都板橋区舟渡工場内に舟渡P O Dを開設
2010年 4 月	ジャスダック証券取引所と大阪証券取引所の合併に伴い、大阪証券取引所 J A S D A Q に上場
2010年 9 月	(株)プレシーズ（連結子会社）が、(株)タイヨーグラフィック（連結子会社）を吸収合併
2010年12月	(株)プレシーズ（連結子会社）が、ミナト印刷紙工(株)（連結子会社）を吸収合併
2010年12月	カガク印刷(株)（連結子会社）が、(株)サンエー（連結子会社）を吸収合併し、商号をサンエーカガク印刷(株)とする
2011年 1 月	(株)大熊整美堂を株式取得により子会社とする
2011年11月	成旺印刷(株)を当社の完全子会社とする株式交換契約を締結
2012年 2 月	成旺印刷(株)を株式交換により子会社とする
2012年 4 月	3 D 立体造形出力サービスを開始
2012年 7 月	プリンティングイン(株)を株式取得により子会社とする
2012年10月	(株)キョーコロを株式取得により子会社とする
2012年11月	サインディスプレイスタジオ芝公園を開設
2013年 1 月	羽陽美術印刷(株)（連結子会社）を吸収合併
2013年 7 月	東京証券取引所と大阪証券取引所の統合に伴い、東京証券取引所 J A S D A Q （スタンダード）に上場
2013年10月	(株)ポパルを株式取得により子会社とする
2014年 4 月	東京都板橋区舟渡に新舟渡工場を建設
2014年 5 月	東京都文京区小石川の小石川工場を閉鎖
2014年 5 月	千葉県市川市の市川塩浜工場を閉鎖
2014年10月	(株)美松堂を株式取得により子会社とする
2014年10月	(株)メディコス・エンタテインメントを株式取得により子会社とする
2014年10月	(株)エム・ピー・ビーを株式取得により子会社とする
2014年10月	単独株式移転による純粋持株会社設立のための株式移転計画の株主総会決議
2014年12月	(株)アスティを株式交換により子会社とする
2014年12月	2014年12月26日付で上場廃止となる

3【事業の内容】

当社企業グループは、当社と子会社38社（連結子会社26社、非連結子会社12社）及び関連会社7社で構成され、「クリエイティブをサポートする企業集団」として、クリエイティブサービス事業を営んでおります。

事業の系統図は、以下のとおりであります。なお、当社は特定上場会社等であります。特定上場会社等に該当することにより、インサイダー取引規制の重要事実の軽微基準については連結ベースの数値に基づいて判断することとなります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万 円)	主要な 事業の 内容	議決権の 所有（被 所有）割 合（％）	関係内容
(連結子会社)					
㈱キャドセンター (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
㈱ソニックジャム (注) 2 3	東京都 港区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
クラウドゲート㈱ (注) 2 3	東京都 台東区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
㈱エグゼクション (注) 2 3	東京都 中央区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
㈱ボパル (注) 2 3	東京都 豊島区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
㈱アスティ (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
㈱プレシーズ (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
ダンサイエンス㈱ (注) 2 3	東京都 中央区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
サンエーカガク印刷㈱ (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
成旺印刷㈱ (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
㈱大熊整美堂 (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
プリンティングイン㈱ (注) 2 3	東京都 武蔵野市	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
日経印刷㈱ (注) 2 3 7	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
東京リスマチック㈱ (注) 2 3 7	東京都 港区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	役員の兼任 経営管理
㈱美松堂 (注) 2 3	東京都 千代田区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
宏和樹脂工業㈱ (注) 2 3	東京都 板橋区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
田中産業㈱ (注) 2 3 6	埼玉県 さいたま市	80	クリエイティブサー ビス事業	56.01	役員の兼任 経営管理
㈱MGS (注) 2 3 6	茨城県 坂東市	80	クリエイティブサー ビス事業	64.95 (44.63)	役員の兼任 経営管理
㈱エム・ピー・ビー (注) 2 3	埼玉県 戸田市	80	クリエイティブサー ビス事業	91.30	経営管理
㈱サカモト (注) 2 3	東京都 台東区	80	クリエイティブサー ビス事業	98.84	経営管理
㈱メディコス・エンタテインメント (注) 2	東京都 港区	80	クリエイティブサー ビス事業	99.93	経営管理
㈱コローレ (注) 2 3	東京都 中央区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
㈱あみューズ (注) 2 3	愛知県 刈谷市	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理

名称	住所	資本金 (百万 円)	主要な 事業の 内容	議決権の 所有(被 所有)割 合(%)	関係内容
(株)エヌビー社 (注) 2 3	東京都 港区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
明和物産(株) (注) 2 3	東京都 中央区	80	クリエイティブサー ビス事業	100.00	経営管理
(持分法適用関連会社)					
(株)イメージ・マジック	東京都 板橋区	73	クリエイティブサー ビス事業	47.05	
(株)アルファコード	東京都 文京区	18	クリエイティブサー ビス事業	48.04	
(株)サイバーネット	東京都 豊島区	95	クリエイティブサー ビス事業	26.27	
NRIフィナンシャル・グラフィックス (株)	東京都 品川区	100	クリエイティブサー ビス事業	(49.00)	

- (注) 1. 上記の他に日経土地(株)が連結子会社であります。また、持分法適用非連結子会社が12社ありますが、重要性が乏しいため記載を省略しております。
2. 特定子会社であります。
3. CMS（キャッシュ・マネジメント・システム）を利用し資金の一元的管理を行っており、CMSに係る預金取引があります。
4. 上記の会社は、有価証券届出書及び有価証券報告書を提出しておりません。
5. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
6. 当連結会計年度中に新たに連結子会社となりました。
7. 売上高（連結会社相互間の売上高を除く）が連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等

(単位：百万円)

	東京リスマチック(株)	日経印刷(株)
① 売上高	17,463	10,662
② 経常利益	588	1,080
③ 当期純利益	315	721
④ 純資産額	2,305	9,558
⑤ 総資産額	14,218	11,557

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における状況

2018年12月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
クリエイティブサービス事業	2,451
合計	2,451

- (注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者は含んでおりません。
 2. 当社企業グループはクリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。
 3. 当連結会計年度において田中産業株式会社及び株式会社MG Sを新たに連結子会社化したため、前連結会計年度末に比べ289名増加いたしました。

(2) 提出会社の状況

2018年12月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（千円）
51	42.2	3.9	5,701

セグメントの名称	従業員数（人）
クリエイティブサービス事業	51
合計	51

- (注) 1. 従業員数は就業人員（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であり、臨時雇用者は含んでおりません。
 2. 平均勤続年数は、関係会社からの出向者は出向元での勤続年数を含んでおります。
 3. 平均年間給与は、従業員に対する税込支払給与額であり、基準外賃金及び賞与を含んでおります。
 4. 当社の事業は、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(3) 労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社企業グループ(当社及び当社の関係会社)が判断したものであります。

(1) 経営の基本方針

当社企業グループは、純粋持株会社である当社のもと、グループ共通の中核概念を制定し、「クリエイティブをサポートする企業集団」として、クリエイティブサービス事業を軸にビジネス展開を積極的に推進することで、お客様にとり必要不可欠な企業集団として企業価値の向上を図ってまいります。

(Vision) We craft your imagination.

お客さまが羽ばたかせるご自身のイマジネーション。私たちは、多様なリソースと先進技術を駆使して、それを確かなカタチにするお手伝いをしていきます。

(Mission) ・チームワーク

お客さまのチームの一員との心持ちで最善を尽くし、ベスト・パートナーとなることをめざします。そのためにも、社内・グループ内のチームワークの強化に努めます。

・プロの真心と技

私たちは、お客さまのご満足と成功を願う真心と、それを支える技を兼ね備えたプロフェッショナルです。

・言い訳のない品質

納品物の品質はもとより、企画段階からアフター・フォローまでのプロセスとスピードにおいても、言い訳のない高い品質を実現します。

(Value) ・プラスαの追求

私たちの最大の喜びは、お客さまにご期待を越える成果をお届けし、その笑顔を見ることが。もっとその笑顔に出会うため、私たちは自らを鍛えながら、お客さまにとってのプラスαを追求し続けます。

・我が事として

私たちは、目の前の一人ひとりのお客さまのご要望や目的、お悩みやお困り事に真正面から向き合います。そして、そのご満足を我が事として、丁寧に、一所懸命に追求します。

・多様性の底力

私たちは、多様な個性、専門性、先進技術をもった人と会社が結びつき、切磋琢磨している集団です。そこに息づく多様性、先進性、独創性をいっそう発揮しながら、お客さまに新鮮な驚きをお届けしていきます。

・新しいカタチ

私たちは、伝統的な印刷をさらに進化させつつ、想像力と先進デジタル技術を駆使して、クライアントの想いを、今まで見たことのないカタチでターゲットの心に刻みつけていきます。

・良き市民

私たちは、良き市民として、お客さま、投資家、協力企業、業界、社員、さらには地域社会や環境に対する責任を、誠意をもって、また積極的に果たしていきます。

(2) 目標とする経営指標

当社企業グループの中期経営計画において、営業利益、経常利益、当期純利益を重要な指標としております。加えてEBITDA、自己資本比率、キャッシュ・フローを重視した経営により、企業の経営基盤を強化し、安定的な成長を図っていく所存であります。

(3) 経営環境及び対処すべき課題

当社企業グループが属するクリエイティブサービス業界においては、IoT、AI、ビッグデータ分析、シェアリングエコノミーモデルなど、高度なIT技術の急速な進歩、印刷技術の進化や、モバイルネットワークの5Gへの高速化を含めたネットワーク環境の利便性向上、4KディスプレイやVR機器等の普及など、クリエイティブの表現方法、表現技術、表現手段は、さらに多種、多様化するものと考えております。非伝統的な印刷製造技術のみならず、3D-CAD・3D-CGを軸とする印刷技術、さらに立体音響や什器などのプロダクトを含む多様なデザイン力、IT構築力をトータルで保持することが、当社企業グループにおける企業間競争において重要であります。また、めまぐるしく変化する経営環境に対応するために、実行プロセスを検証する仕組みを整えたうえで、M&Aを含め継続的にソリューションを強化する必要があります。こうした環境認識の下、当社企業グループの対処すべき課題は以下のとおりであります。

- ① グループ各社の役割と事業責任の明確化、また、経営の機動性を向上させ、効果的な経営資源の調達及び配分を行うことでグループ全体の企業価値の向上を図ってまいります。
- ② グループ各社が専門とする技術及びノウハウのさらなる向上を図るとともに、グループ各社の人材を含めたソリューションの連携強化、付加価値の高いサービスの開発、提供により顧客満足度の向上に取り組んでまいります。
- ③ 主力事業領域におけるシェア拡大、新規事業領域への挑戦、また不採算事業の改善等を、M&Aを含め機動的に取り組む、安定的な事業ポートフォリオの形成を目指してまいります。
- ④ 当社企業グループは事業拡大のため、人材の確保及び教育を重要な課題と認識しております。当社が中心となって、潜在能力の高い人材の獲得に向けて各種採用活動を進めるとともに、ワークライフバランスや教育を重視し、人材育成を積極的に進めてまいります。

2【事業等のリスク】

以下において、当社企業グループが事業展開その他に関するリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。当社企業グループの事業、業績及び財務状況は、かかるリスク要因のいずれによっても著しい悪影響を受ける可能性があります。当社株式の市場価格は、これらの要因のいずれによっても下落する可能性があります。

当社企業グループは、これらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める方針であります。当社株式に関する投資判断は、本書の記載を慎重に検討した上で行われる必要があると考えております。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社企業グループが判断したものであります。

(1) 経済動向による影響について

当社企業グループにおける営業収入は、日本国内市場における広告宣伝活動の需要に大きく影響を受けます。国内経済の低迷が長期化した場合は、企業収益の減少に伴い、企業は広告宣伝活動を縮小する傾向にあるため、当社企業グループの業績は大きな影響を受ける可能性があります。

当社企業グループの予算編成及び業績予想は、当社企業グループが属する市場の成長予測、各顧客のクリエイティブサービス関連の需要予測等作成時点で入手可能な情報に基づいて作成されておりますが、当社企業グループの業績予想は実績と乖離する可能性があります。

(2) 競合について

当社企業グループは顧客にとって付加価値の高い製品・サービスをワンストップで提供しているものと自負しておりますが、価格面において競争を優位に展開できる保証はなく、当社企業グループの製品・サービスが激しい価格競争にさらされ、当社企業グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 売上債権管理上のリスク

当社企業グループは、社内規定に基づいて締結された顧客との契約をベースに売上債権を管理しております。また、新規取引毎に信用調査を実施し、信用度を確認した後取引口座を設定し、債権管理担当者が日々入金状況を確認しており、債権管理において特段の問題は生じておりません。

しかしながら、経済情勢の急速な悪化と情報媒体の急速な多様化による印刷関連企業の淘汰により、経営基盤の脆弱な企業等において、経営状況が悪化する場合も考えられます。

当社企業グループでは、今後、信用調査をより一層強化していく方針ですが、予測不能な事態が生じた場合には売上債権の回収に支障をきたす可能性があります。

(4) 自然災害等のリスクについて

地震等の自然災害によって、当社企業グループの製造拠点が壊滅的な損害を受ける可能性があります。当社企業グループの工場、事業所は一定の地震に耐え得る機能を有しております。しかしながら、工場、事業所、機械及びライフラインが壊滅的な損害を被った場合、製造業務が一時的に停止し、業績に影響を及ぼす可能性があります。さらに工場・事業所、機械装置類の修復、修理または代替のために多額の費用を要する可能性もあります。

(5) 情報システムとセキュリティ

インターネットをはじめとするコンピュータネットワークや情報システムの果たす役割が高まり、情報システムの構築やセキュリティ対策の確立は事業活動を継続する上で、いまや不可欠となっております。これに対して、近年ソフト・ハードの不具合やコンピュータウイルス等による情報システムの停止、顧客情報の漏洩等さまざまなリスクの発生の可能性が高まっております。当社企業グループは、個人情報の保護に努め、システムとデータの保守・管理には万全を尽くしております。しかしながら、万一データの漏洩が発生した場合は、当社の信用が低下し、今後の事業展開に多大な影響を与える可能性があります。

(6) 法的規制等

法令の遵守を基本として事業を進めておりますが、製造物責任や廃棄物処理責任、環境・個人情報保護関連、税制関連等において、さまざまな法的規制を受けており、今後更にその規制が強化されることも考えられます。そのような場合、事業活動に対する制約の拡大やコストの増加も予想され、当社企業グループの事業活動に影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社企業グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の概要は次のとおりであります。

① 経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、西日本のみならず、北海道を含む東日本において大きな自然災害に見舞われたものの、企業収益の回復や雇用・所得環境の改善傾向が継続するなど、政府による各種経済政策の効果を背景に、緩やかな回復基調で推移いたしました。一方、海外においては、一部の国による保護主義的な経済政策に起因する貿易摩擦問題など不確実性の影響が続き、原油価格や為替相場など、商品金融資本市場が大きく変動するなど、世界経済は、依然として不透明な状況で推移いたしました。

当社企業グループは、クリエイティブサービスを事業とし、お客様が創造性（クリエイティブ）を表現するために必要である多様なソリューションを提供するため、「クリエイティブをサポートする企業集団」として、幅広いビジネスを積極的に展開、推進しております。

クリエイティブサービスを主な事業とするグループ各社が、専門とする付加価値の高い技術及びノウハウ、最新の設備を備えた生産・製造設備、また、M&A等により、常に商材またはサービスを増強し、ワンストップで多様なクリエイティブニーズを確かなカタチとしてご提供できるよう努めております。

当連結会計年度の業績は、前連結会計年度に新たに連結子会社となった日経印刷株式会社他7社の業績に加えて、田中産業株式会社及び同社子会社の株式会社MG Sが第2四半期連結会計期間に持分法適用関連会社から連結子会社となり、第3四半期連結会計期間より両社の業績が加わっております。その結果、売上高511億45百万円（前年同期比40.5%増）となりました。一方で、グループ各社のシナジー創出を目的に、事業所移転及び改装などの費用を計上したことにより、営業利益は16億12百万円（前年同期比14.4%増）、持分法適用関連会社の一部について、のれん相当額の一時償却を計上したため、経常利益は12億34百万円（前年同期比4.9%減）、経常利益に減価償却費、のれんの償却額及び金融費用を加えたEBITDAは36億91百万円（前年同期比27.4%増）となりました。なお、今後の健全な事業運営を目的として、改めてM&Aの実行プロセスを厳格に検証する仕組みを再定義いたしました。その検証結果に基づき連結子会社の一部についてのれんを一括償却いたしました。加えて、退職金制度を有した当社と連結子会社を含め計11社が同制度を廃止したことによる費用を計上したことにより、親会社株主に帰属する当期純損失9億59百万円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益12億51百万円）となりました。

なお、当社企業グループの事業は単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

② 財政状態の状況

（資産）

当連結会計年度末における総資産は、主に、受取手形及び売掛金、有形固定資産が増加いたしました。現金及び預金、短期貸付金及びのれんの減少により、前連結会計年度末に比べて5億43百万円減少し、501億2百万円となりました。

（負債）

当連結会計年度末における負債は、主に、退職給付に係る負債及び長期借入金が減少しましたが、短期借入金及びその他固定負債に含まれる長期未払金の増加により、前連結会計年度末に比べて11億58百万円増加し、391億29百万円となりました。

（純資産）

当連結会計年度末における純資産は、主に、非支配株主持分が増加しましたが、自己株式取得及び利益剰余金の減少により、前連結会計年度末に比べて17億1百万円減少し、109億73百万円となりました。

③ キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末に比べて11億13百万円減少し55億50百万円となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は22億82百万円（前年同期比3億47百万円減）となりました。これは主に、税金等調整前当期純損失2億46百万円、法人税等の支払額8億98百万円、退職給付に係る負債の減少10億32百万円による資金の減少がありましたが、減価償却費17億33百万円、減損損失14億7百万円、のれん償却額4億82百万円、売上債権の減少額7億11百万円により資金が増加したことによるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は19億24百万円（前年同期比96億36百万円減）となりました。これは主に、貸付金の回収による収入16億70百万円、連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入6億94百万円による資金の増加がありましたが、有形固定資産の取得による支出37億93百万円、貸付けによる支出6億41百万円による資金の減少があったことによるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は14億97百万円（前年同期は128億66百万円獲得）となりました。これは主に、長期借入れによる収入20億円による資金の増加がありましたが、長期借入金の返済による支出24億89百万円、自己株式の取得による支出12億58百万円による資金の減少があったことによるものです。

④ 生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであり、当連結会計年度の生産実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	
	金額（百万円）	前年同期比（％）
クリエイティブサービス事業	51,163	140.5

(注) 金額は販売価額によっており、消費税等は含まれておりません。

b. 受注実績

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであり、当連結会計年度の受注実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高（百万円）	前年同期比（％）	受注残高（百万円）	前年同期比（％）
クリエイティブサービス事業	51,453	139.6	3,045	111.2

(注) 金額は販売価額によっており、消費税等は含まれておりません。

c. 販売実績

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであり、当連結会計年度の販売実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)	
	金額（百万円）	前年同期比（％）
クリエイティブサービス事業	51,145	140.5

(注) 1 金額は販売価額によっており、消費税等は含まれておりません。

2 総販売実績の10%以上を占める販売顧客に該当するものではありません。

(2) 経営者の視点による当社企業グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社企業グループの経営成績等の状況に関する認識および分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社企業グループが判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社企業グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたりまして、連結会計年度末における資産・負債の報告数値、報告期間における収益・費用の報告数値に影響を与える見積りは、主に貸倒引当金、退職給付引当金、資産除去債務、繰延税金資産及び時価のない投資有価証券、固定資産の減損、のれんの評価であり、その評価については継続して行っております。

なお、評価及び見積りについては、過去の実績や状況に応じて合理的と考えられる要因等に基づき行っておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は異なる場合があります。

② 当連結会計年度の経営成績の分析

(売上高)

売上高は、511億45百万円（前連結会計年度363億93百万円）となりました。売上高の概況及び詳細については、「第2 事業の状況 3経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ①経営成績の状況」をご参照ください。

(売上原価、販売費及び一般管理費)

売上原価は、連結子会社が増加したことにより、366億45百万円（前連結会計年度257億2百万円）となりました。

以上の結果、売上総利益は、145億円（前連結会計年度106億91百万円）、売上総利益率が28.35%（前連結会計年度29.38%）となりました。

販売費及び一般管理費は、連結子会社が増加したこと並びに、グループシナジー創出を目的に、事業所移転及び改装などの費用が発生したため、128億88百万円（前連結会計年度92億80百万円）となりました。

以上の結果、営業利益は16億12百万円（前連結会計年度14億10百万円）となりました。

(営業外損益)

営業外収益は、助成金収入が発生したため、2億61百万円（前連結会計年度1億94百万円）、営業外費用は、持分法適用関連会社の一部について、のれん相当額の一時償却を計上したことで、持分法による投資損失が発生したため、6億38百万円（前連結会計年度3億6百万円）となりました。

以上の結果、経常利益は、12億34百万円（前連結会計年度12億98百万円）となりました。

(特別損益)

特別利益は、負ののれん発生益が減少したことにより、3億97百万円（前連結会計年度8億55百万円）、特別損失は、連結子会社の一部について、のれんを一括償却したことによる減損損失が増加したこと、及び退職金制度を廃止したことによる費用を計上したことにより、18億79百万円（前連結会計年度1億33百万円）となりました。

以上の結果、親会社株主に帰属する当期純損失は9億59百万円（前連結会計年度は親会社株主に帰属する当期純利益12億51百万円）となりました。

③ 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当連結会計年度における状況は、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ③キャッシュ・フローの状況」をご参照ください。

キャッシュ・フロー指標のトレンド

	2017年12月期	2018年12月期
自己資本比率 (%)	25.0	19.8
時価ベースの自己資本比率 (%)	24.4	17.2
キャッシュ・フロー対 有利子負債比率 (年)	10.5	12.5
インタレスト・カバレッジ・レシオ (倍)	30.5	18.7

(注) 自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

債務償還年数：有利子負債／営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー／利払い

*各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により算出しております。

*株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数により算出しております。

*営業キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。

*有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。

*利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の支払利息の支払額を使用しております。

④ 経営成績に重要な影響を与える要因、経営者の問題認識と今後の方針について

経営成績に重要な影響を及ぼす可能性のある主な事項は、「2 事業等のリスク」に記載いたしました。

当社企業グループ経営陣は、現在の事業環境及び入手可能な情報に基づき最善の経営方針を立案し、スピードを持って対応していくよう努めております。

当社企業グループでは、今後も「クリエイティブをサポートする企業集団」として、クリエイティブサービス事業を軸に事業を行ってまいります。またニーズの変化に対応するために、柔軟に商材ポートフォリオ、人材ポートフォリオ、事業ポートフォリオの最適化を進めてまいります。

4 【経営上の重要な契約等】

特に記載すべき事項はありません。

5 【研究開発活動】

特に記載すべき事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度に実施した設備投資の総額は、36億1百万円となりました。主なものとしては、東京都板橋区舟渡の土地及びデジタル印刷設備等の機械装置、また、事務所移設に伴う建物附属設備及び備品等であります。

なお、セグメントの設備の状況につきましては、当社企業グループはクリエイティブサービス事業の単一セグメントでありますので記載しておりません。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2018年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
			建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他 (注2)	合計	
当社	舟渡倉庫 東京都板橋区	クリエイティブ サービス事業	45	—	2,177 (57,411.11)	—	2,222	—

(2) 国内子会社

2018年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
			建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他 (注2)	合計	
東京リスマチック株式会社	舟渡工場 東京都板橋区	クリエイティブ サービス事業	1,776	551	1,066 (5,196.65)	12	3,408	151
	西台工場 東京都板橋区		385	322	1,082 (4,517.88)	7	1,797	146
	内神田ビル 東京都千代田区（注）3		35	11	672 (642.43)	5	725	71
	芝公園センター 東京都港区（注）3		56	143	1,072 (979.59)	19	1,291	75
日経印刷株式会社	グラフィックガーデン 東京都板橋区（注）4	クリエイティブ	1,273	273	1,447 (5,909.59)	66	3,060	227
	浮間工場 東京都北区	サービス事業	98	103	447 (1,154.39)	1	651	32
田中産業株式会社	本社工場Y棟 埼玉県さいたま市中央区	クリエイティブ	210	308	319 (2,009.98)	6	844	95
	本社工場K棟 埼玉県さいたま市中央区	サービス事業	678	371	365 (3,246.44)	3	1,419	78
株式会社美松堂	つくば工場 茨城県つくば市	クリエイティブ サービス事業	343	341	397 (21,032.53)	3	1,085	119
宏和樹脂工業株式会社	板橋工場 東京都板橋区	クリエイティブ サービス事業	334	176	120 (921.30)	0	631	40
株式会社MGS	本社工場 茨城県	クリエイティブ サービス事業	158	84	313 (56,060.33)	6	563	80

- (注) 1. 当社企業グループの消費税等に係る会計処理は、税抜方式によっているため、この項に記載の金額には、消費税等は含まれておりません。
2. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品であります。
3. 一部をグループ会社が賃借しております。
4. グラフィックガーデンの土地は、日経土地株式会社所有の土地全部を日経印刷株式会社が賃借しておりますので、日経土地株式会社の帳簿価額及び面積を記載しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	40,000,000
計	40,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2018年12月31日)	提出日現在発行数（株） (2019年3月29日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	13,817,934	13,817,934	東京証券取引所 J A S D A Q (スタンダード)	完全議決権株式であり、権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	13,817,934	13,817,934	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高（株）	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額（百万 円）	資本準備金残 高（百万円）
2015年1月5日 (注) 1	12,187,280	12,187,280	400	400	—	—
2016年3月25日 (注) 2	—	12,187,280	—	400	21	21
2017年12月31日 (注) 3	1,630,654	13,817,934	—	400	—	21

(注) 1. 発行済株式総数及び資本金の増加は、単独株式移転により会社が設立されたことによるものであります。

2. 剰余金の配当に伴う積立額であります。

3. 2017年12月31日を効力発生日とするグラフィックグループ株式会社の吸収合併に伴い交付いたしました。

(5) 【所有者別状況】

2018年12月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）							単元未満 株式の状況 （株）	
	政府及び地方 公共団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数（人）	－	1	14	25	11	1	2,607	2,659	－
所有株式数 （単元）	－	34	1,791	56,406	421	1	79,439	138,092	8,734
所有株式数の 割合（％）	－	0.02	1.30	40.85	0.30	0.00	57.53	100	－

（注）自己株式1,309,136株は、「個人その他」に13,091単元、「単元未満株式の状況」に36株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2018年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
株式会社TKO	東京都港区赤坂8丁目4番14号	5,016	40.10
日本創発グループ従業員持株会	東京都台東区上野3丁目24番6号	1,681	13.44
林 健二	東京都練馬区	1,000	7.99
株式会社ウイルコホールディングス	石川県白山市福留町370番地	360	2.88
仲田 広道	神奈川県川崎市麻生区	335	2.68
鈴木 隆一	東京都文京区	326	2.61
中田 久士	東京都港区	303	2.42
林 基史	愛知県刈谷市	205	1.64
藤田 一郎	東京都港区	112	0.90
村田 健	東京都目黒区	112	0.90
計	—	9,453	75.57

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2018年12月31日現在

区分	株式数（株）	議決権の数（個）	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式（自己株式等）	—	—	—
議決権制限株式（その他）	—	—	—
完全議決権株式（自己株式等）	普通株式 1,309,100	—	—
完全議決権株式（その他） （注）	普通株式 12,500,100	125,001	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
単元未満株式	普通株式 8,734	—	—
発行済株式総数	13,817,934	—	—
総株主の議決権	—	125,001	—

②【自己株式等】

2018年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合 (%)
㈱日本創発グループ	東京都台東区上野3丁目24番6号	1,309,100	—	1,309,100	9.48
計	—	1,309,100	—	1,309,100	9.48

(8) 【役員・従業員株式所有制度の内容】

①従業員株式所有制度の概要

当社は、当社企業グループの従業員に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生増進策として、持株会の拡充を通じて従業員の株式取得及び保有を促進することにより従業員の財産形成を支援することを目的として、「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」を導入いたしました。

本プランは、持株会に加入するすべての従業員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社を委託者、野村信託銀行株式会社を受託者とするE-Ship®信託契約を締結し、当社が信託銀行に従業員持株会専用信託（以下「従持信託」といいます。）を設定し、従持信託は信託期間内で当社持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を一括取得し、その後は、従持信託から当社持株会に当社株式の売却を継続的に行います。信託終了時点で従持信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。なお、当社は、従持信託が当社株式を取得するための借入に対し保証することになるため、当社株価の下落により従持信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において従持信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、保証契約に基づき、当社が当該残債を弁済することになります。

当該従持信託については、経済的実態を重視し、当社と従持信託は一体であるとする会計処理をしております。従いまして、従持信託が所有する当社株式や従持信託の資産及び負債並びに費用及び収益については、連結貸借対照表及び連結損益計算書に含めて計上しております。

なお、本プランは2018年4月10日をもって終了いたしました。信託終了時まで、従持信託内に株式売却益相当額が累積したため、それを残余財産として、受益者適格要件を満たす当社企業グループ従業員（設定期間中に対象持株会に加入していたもの全員、退職者も含む）に分配いたしました。そのため、2018年12月31日時点における従持信託の保有株式数はありません。

②従業員持株会に取得させる予定の株式の総数

1,206千株（制度導入時点）

③当該従業員株式所有制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

受益者適格要件を満たす日本創発グループ従業員持株会会員

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づく取締役会決議による取得

区分	株式数（株）	価額の総額（円）
取締役会（2018年2月20日）での決議状況 （取得期間 2018年2月21日～2018年2月21日）	1,200,000	1,200,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	1,105,000	1,105,000,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	95,000	95,000,000
当事業年度の末日現在の未行使割合（%）	7.9	7.9
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合（%）	7.9	7.9

会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づく取締役会決議による取得

区分	株式数（株）	価額の総額（円）
取締役会（2018年5月29日）での決議状況 （取得期間 2018年5月30日～2018年5月30日）	180,000	183,600,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	150,000	153,000,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	30,000	30,600,000
当事業年度の末日現在の未行使割合（%）	16.6	16.6
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合（%）	16.6	16.6

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数（株）	価額の総額（円）
当事業年度における取得自己株式	64	67,340
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 1. 当期間における取得自己株式数には、2019年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

2. 取得自己株式数には、従業員持株会信託口が取得した当社株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数（株）	処分価額の総額（円）	株式数（株）	処分価額の総額（円）
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	1,309,136	—	1,309,136	—

(注) 1. 保有自己株式数には、従業員持株会信託口が保有する当社株式数を含めておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、2019年3月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社は、利益配分については、年4回とすることを基本として、取締役会が都度決定することにしております。また、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項は、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって定める。」旨定款に定めております。

配当金については、安定配当の継続を基本としつつ、業績及び財務状況、配当性向、内部留保などを総合的に勘案して決定することを基本方針としております。

このうち内部留保金は、経営基盤の強化を図るとともに、事業拡大の観点から成長が見込まれる分野への投資などに有効活用してまいります。

この方針に基づき、当期の期末配当金につきましては、1株当たり6円とすることを、2019年2月13日開催の取締役会で決議いたしました。これによって第1四半期配当、第2四半期配当、第3四半期配当と合わせた当期の年間配当額は、1株当たり24円となりました。

なお、当期に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	1株当たり配当額（円）	配当金の総額（百万円）	効力発生日
2018年5月11日 取締役会決議（注）1	6.00	75	2018年5月28日
2018年8月13日 取締役会決議	6.00	75	2018年9月26日
2018年11月9日 取締役会決議	6.00	75	2018年11月27日
2019年2月13日 取締役会決議（注）2	6.00	75	2019年3月29日

（注） 1. 配当金の総額には、従業員持株会信託に対する配当金を含めておりません。これは、従業員持株会信託が保有する当社株式を自己株式として認識しているためであります。

2. 当期の期末配当金につきましては、資本剰余金を配当原資としております。

4【株価の推移】

（1）【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第1期	第2期	第3期	第4期
決算年月	2015年12月	2016年12月	2017年12月	2018年12月
最高（円）	676	685	1,028	1,177
最低（円）	579	510	633	576

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであります。

（2）【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2018年7月	2018年8月	2018年9月	2018年10月	2018年11月	2018年12月
最高（円）	1,165	1,119	1,014	1,017	939	814
最低（円）	1,028	898	910	867	660	576

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであります。

5 【役員の状況】

男性9名 女性2名 （役員のうち女性の比率18.1%）

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役社長 (代表取締役)	－	藤田 一郎	1966年2月16日	1990年4月 野村證券株式会社入社 2001年4月 シダックス株式会社 取締役 2002年4月 同社 常務取締役 2007年4月 大新東株式会社 顧問 2007年6月 同社 代表取締役副社長 2008年10月 ビジネスソリューション株式会社 代表取締役（現任） 2010年3月 クラウドゲート株式会社 代表取締役（現任） 2015年5月 クラウドゲームス株式会社 代表取締役 2015年10月 株式会社Creaple 代表取締役 2016年6月 京都きもの友禅株式会社 取締役 2016年12月 当社入社 顧問 2017年3月 当社 代表取締役社長（現任）	(注) 1	112
取締役	－	鈴木 隆一	1967年2月14日	1990年8月 東京リスマチック株式会社入社 1995年3月 同社 常務取締役 1995年12月 同社 代表取締役社長 2008年10月 株式会社TKO 代表取締役（現任） 2014年10月 株式会社美松堂 代表取締役 2014年10月 株式会社ピアノコ 代表取締役 2015年1月 当社 代表取締役社長 2015年7月 株式会社サカモト 代表取締役 2017年3月 当社 代表取締役副社長 2017年11月 当社 取締役副社長 2018年3月 当社 取締役（現任） 2019年1月 東京リスマチック株式会社 代表取締役（現任）	(注) 1	326
取締役	－	寺澤 眞一	1965年8月18日	2003年2月 東京リスマチック株式会社入社 2005年3月 同社 取締役生産本部長 2013年12月 同社 取締役生産本部管掌 2015年1月 当社 取締役（現任） 2015年10月 東京リスマチック株式会社 取締役 2019年1月 同社 取締役社長（現任）	(注) 1	7
取締役	－	鈴木 俊郎	1969年5月30日	1993年1月 東京リスマチック株式会社入社 2001年6月 同社 社長室長 2004年1月 同社 営業推進本部長 2006年3月 同社 取締役営業推進本部長 2007年7月 同社 取締役営業本部長 2009年1月 同社 取締役事業本部長 2011年1月 同社 取締役営業推進本部長 2012年2月 株式会社プレシーズ 代表取締役（現任） 2013年1月 東京リスマチック株式会社 取締役 2015年1月 当社 取締役（現任） 2019年1月 株式会社キャドセンター 代表取締役（現任）	(注) 1	10
取締役	管理 本部 長	菊地 克二	1959年4月13日	1995年9月 東京リスマチック株式会社入社 2008年2月 同社 管理本部長 2015年1月 当社 管理本部長 2017年3月 当社 取締役管理本部長（現任）	(注) 1	6
取締役	－	林 基史	1967年5月25日	1992年4月 国際証券株式会社（現三菱UFJモルガン・スタンレー証券）入社 2003年8月 有限会社あみューズ設立 代表取締役 2005年7月 組織変更により株式会社あみューズ 代表取締役社長（現任） 2019年3月 当社 取締役（現任）	(注) 1	205

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (監査等委員)	—	野沢 佳津夫	1951年9月27日	1974年4月 キヤノン販売株式会社入社 1991年5月 キヤノンU.S.A. Inc 赴任 1998年1月 キヤノンCanada, Inc 赴任 2002年1月 キヤノン販売株式会社 事務機企画本部長 2005年1月 同社 名古屋支店長、中部営業本部長 2006年4月 同社 理事 2007年4月 同社 理事、PPS販売事業部長 2007年4月 キヤノンプリントスクエア株式会社 代表取締役 2012年10月 日本オセ株式会社 代表取締役 2014年5月 シナジーコミュニケーションズ株式会社入社 2016年3月 当社 社外取締役[監査等委員] (現任)	(注) 2 (注) 3	—
取締役 (監査等委員)	—	大塚 利百紀	1948年1月23日	1971年4月 株式会社写真研入社 2001年8月 同社 取締役営業グループ長 2003年7月 日立キャピタル株式会社入社 2008年7月 興銀リース株式会社入社 2011年1月 東京リスマチック株式会社 顧問 2011年3月 東京リスマチック株式会社 常勤監査役 2015年1月 当社 常勤監査役 2016年3月 当社 社外取締役[監査等委員] (現任)	(注) 2 (注) 3	—
取締役 (監査等委員)	—	寺田 正主	1979年1月15日	2001年8月 株式会社三陽商会入社 2007年3月 明治学院大学法科大学院修了 2008年9月 司法試験合格 2010年4月 弁護士登録 浅沼・杉浦法律事務所 弁護士 2012年5月 学校法人麻布学園 評議員就任(現任) 2017年7月 寺田法律事務所設立 同事務所 代表(現任) 2017年11月 当社 社外取締役[監査等委員] (現任)	(注) 2 (注) 3	—
取締役 (監査等委員)	—	篠崎 祥子	1983年11月7日	2006年4月 エイボン・プロダクツ株式会社入社 2011年12月 株式会社ダイアナ入社 2012年10月 株式会社フードコスメ入社 広報部長兼マーケティング部長 2012年12月 株式会社アイケイ(株式会社フードコスメ親会社) 広報部長兼マーケティング部長兼職 2016年7月 エスヴィータ株式会社設立 代表取締役社長 (現任) 2017年11月 当社 社外取締役[監査等委員] (現任)	(注) 2 (注) 3	—
取締役 (監査等委員)	—	菅波 希衣子	1972年3月20日	2001年4月 京浜測器株式会社(現ワッティール株式会社) 取締役 2005年7月 同社 常務執行役員 2015年4月 ワッティール株式会社 専務取締役 2016年4月 同社 取締役社長(現任) 2019年3月 当社 社外取締役[監査等委員] (現任)	(注) 2 (注) 4	—
計						669

(注) 1. 取締役(監査等委員であるものを除く)の任期は、2019年3月28日開催の定時株主総会の終結の時から1年間です。

2. 監査等委員である取締役は、全員社外取締役であります。

3. 2018年3月29日開催の定時株主総会の終結の時から2年間です。

4. 2019年3月28日開催の定時株主総会の終結の時から1年間です。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

※ コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、企業として社会的責任を果たし、株主や消費者、取引先、社員など企業を取り巻くあらゆる利害関係者から信頼されることが企業価値の継続的な向上に不可欠であると認識しております。そのためにはコーポレート・ガバナンスの構築が経営上の重要課題であると考えております。

① 企業統治の体制

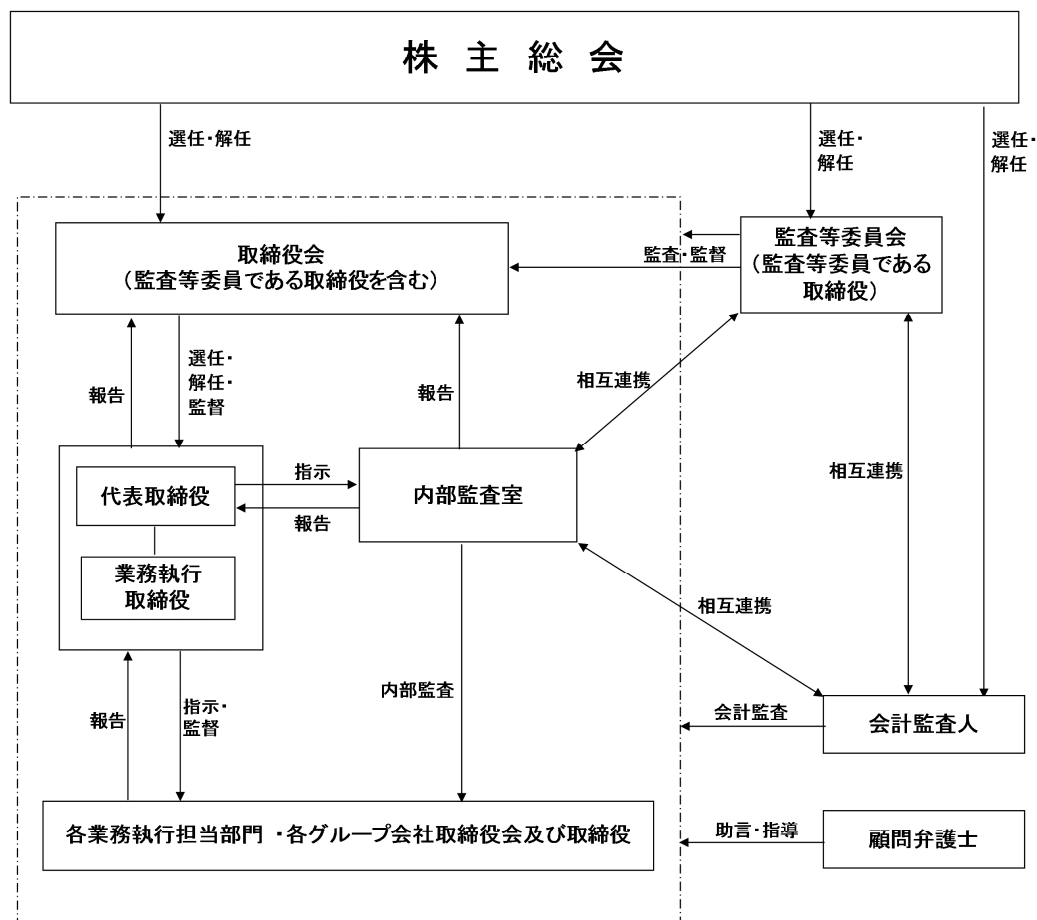
(a) 企業統治体制の概要

取締役会（有価証券報告書提出日現在、取締役は11名、うち監査等委員である取締役は5名であります。）においては、経営上の最高意思決定機関として当社及びグループ会社の経営戦略に基づいた経営の重要事項について審議決定を行うとともに、法令及び定款に定められた事項を決議し、それに基づいた業務執行状況を監督しております。また、定例の取締役会を3カ月に1回以上開催するほか、必要に応じ臨時取締役会を開催し、重要事項の審議・決定を行います。

監査等委員会は経営の透明性と客観性を担保する為、過半数の社外取締役（有価証券報告書提出日現在、監査等委員である取締役全員が社外取締役であります。）を設置し、適法性監査のみならず、妥当性監査を行い、取締役会の監督機能をより一層強化するとともに、当社のコーポレート・ガバナンスのさらなる充実を図っております。また、各監査等委員は取締役会に出席し、監査等委員以外の取締役の職務執行を監査するとともに、会計監査人との相互連携により、監査の実効性の充実を図ってまいります。

当社のコーポレート・ガバナンス及び内部管理体制の概要は、下記のとおりであります。

<ガバナンス体制>



(b) 当該体制を採用する理由

当社は、監査等委員会設置会社制度が、取締役会の監督機能の強化とコーポレート・ガバナンスの一層の充実を図るとともに、迅速な意思決定と業務執行により経営の機動性の向上が図れると判断したため、同機関設計を採用しております。

(c) 内部統制システムの整備状況

当社は、取締役の職務執行が法令および定款に適合することを確保するための体制、その他当社及びグループ各社の業務の適正を確保するための体制について、以下のとおり、整備しております。

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- i) 取締役会は、法令、定款及び行動規範等の社内規程に従い、取締役の職務執行を監督する。
- ii) 管理本部は、コンプライアンスへの取組みを全社横断的に統括し、コンプライアンスの徹底を図る。
- iii) 内部監査室は、監査を通じて各事業部門の職務の執行が法令、定款及び社内規程に適合しているか否かを定期的または随時に当社およびグループ各事業部門に対する監査を実施し、その結果を内部監査室長が必要に応じて取締役会及び監査等委員会に報告する。
- iv) 代表取締役社長が、随時「行動規範」及び「法令遵守」の精神を役職員に伝えることにより、その精神をあらゆる企業活動の前提とすることを徹底する。
- v) 役職員の法令上疑義のある行為等については、外部通報窓口として設置された企業倫理ヘルプラインにより内部者通報制度を運用する。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役は取締役会議事録、稟議書、その他重要な職務執行に係る情報が記載された文書を、関連資料とともに、適切に管理する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

管理本部は、経営に係るリスク全般を管理する組織として「危機管理規程」、「リスク管理規程」等に基づき経営における財務リスク及び業務リスク等の危機管理等を総括的に管理し、全社的統制リスク管理の状況を検証し、各リスクに対応し、その結果を定期的に取締役会及び監査等委員会に報告する。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- i) 取締役会については、「取締役会規程」に基づきその適切な運営を確保するため、定例の取締役会を3カ月に1回以上開催し、また、必要に応じて臨時に取締役会を開催し、重要事項の決定及び取締役の業務執行状況の監督を行うこととする。
- ii) 取締役会は、経営計画を策定するとともにその執行を監督する。毎事業年度においては、経営計画との整合性を持たせた各社予算と事業部門別重点施策を策定し、担当する取締役はその実現のため、最も効率的な業務執行制度を決定するとともに、その執行に関し責任を有する。

5. 使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

代表取締役社長の直轄組織である内部監査室の内部監査により、使用人の職務執行につき法令、定款、社内規程等の遵守状況を監査する。

また、外部通報窓口として設置された企業倫理ヘルプラインによる内部者通報制度により、コンプライアンス体制を強化する。

6. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

i) 子会社の取締役及び使用人の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制

「関係会社管理規程」を制定し、子会社に対し、重要な案件に関する事前協議等、当社の関与を義務付けるほか、同規程に定める一定の事項について、定期及び随時に当社に報告させる。

ii) 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

子会社は、当社の定める「危機管理規程」、「リスク管理規程」等に準拠し、グループ一体となってリスクマネジメントの一元的な運用管理を行う。

iii) 子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

子会社は、「職務権限規程」を制定し、意思決定を効率的に行うほか、グループ共通の社内イントラネットを活用し、業務の効率化に必要となる情報インフラの整備、構築を図る。

- iv) 子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
当社の内部監査室は、子会社の業務状況の内部監査を実施し、「内部監査規程」に従い随時、代表取締役社長へ報告する。また、当社管理本部は、必要に応じて内部統制の改善策の指導、実施の支援・助言を対象部署に対して行う。
 - v) その他の業務の適正を確保するための体制
当社は、子会社の自主性、独立性を尊重しつつ、その事業運営の支援、育成を目的として、経営全般にわたる管理を実施する。
当社企業グループは、当社及び子会社の営業、生産、管理等の部門において、横断的な組織として、情報交換や共有化を図るとともに、重要な問題点についての審議を通じて業務の適正な運営を実現する。
7. 監査等委員がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項
- i) 監査等委員会の職務を補助するため、役員室を設置し、監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合は、監査等委員会と協議し適切なスタッフを配置する。
 - ii) 監査等委員会の職務を補助する使用人は、監査等委員会の指示に基づき、監査等委員会の監査に係る権限の行使を補助する。
8. 取締役（監査等委員である取締役を除く。）から監査等委員会補助者の独立性及び指示の実効性に関する事項
- i) 取締役（監査等委員である取締役を除く。）から監査等委員補助者の独立性及び指示の実効性を確保するために、監査等委員補助者の人事異動、人事評価、懲戒に関しては、監査等委員会の事前の同意を得る。
 - ii) 監査等委員会の職務を補助する使用人の監査に係る指示の実効性を確保するための社内規程の整備等を行う。
9. 取締役（監査等委員である取締役を除く。）が監査等委員会に報告をするための体制、その他の監査等委員会への報告に関する体制
- 当社及びその子会社の取締役及び使用人またはこれらの者から報告を受けた者が当社監査等委員会に報告するための手続を整備し、また、監査等委員会が必要とする情報を適宜提供する。
10. 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- 監査等委員会に報告したことを理由とする不利益処分その他の不当な取扱いを禁止するとともに、子会社においてもその徹底を図る。
11. 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- i) 監査等委員の職務の執行上必要と認められる費用について予算化し、その前払等の請求があるときは当該請求が適正でない場合を除き、速やかにこれに応じることとする。
 - ii) 緊急または臨時に支出した費用については、事後の償還請求に応じる。
12. その他監査等委員の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- i) 監査等委員は、代表取締役社長と定期的に会合を持ち、業務報告とは別に会社運営に関する意見交換を行う他、意思の疎通を図るものとする。
 - ii) 監査等委員は、会計監査人および内部監査室とそれぞれ定期的に意見交換を実施する。
 - iii) 社外取締役の監査等委員と責任限定契約を締結し、果敢な監査が実施できる環境を確保する。
 - iv) 監査等委員は、その職務を遂行するために子会社の監査役等との情報連絡を行うなど、子会社の監査役等との意思疎通及び情報の交換を図る。
13. 財務報告の信頼性を確保するための体制
- i) 適正な会計処理を確保し、財務報告の信頼性を向上させるため、経理業務に関する規程を定めるとともに、財務報告に係る内部統制の体制整備と有効性の向上を図る。
 - ii) 財務報告の信頼性確保及び金融商品取引法第24条の4の4に規定する内部統制報告書の有効かつ適切な提出のため、代表取締役社長の指示の下、内部統制システムの構築を行い、その仕組みが適正に機能することを継続的に評価し、必要な是正を行うとともに、金融商品取引法及び他関係法令等との適合性を確保する。
14. 反社会的勢力排除に関する基本方針
- i) 基本的な考え方
当社は、社会の秩序や企業の健全な活動に脅威を与える反社会的勢力に対しては、毅然とした態度で対応し、取引関係その他一切の関係を持たないことを基本方針とする。
また、反社会的勢力に関する情報収集に努め、部署間での連携を密にし、所轄警察署・弁護士等外部専門機関との連絡体制を築いた上で、反社会的勢力との取引の防止に努め、関係を遮断していく体制を整備する。

ii) 整備

- イ. 反社会的勢力に対する当社の姿勢を「行動規範」に規定し、対応方法等に関しては、「反社会的勢力対応規程」に規定している。これらは共にイントラネット等により役職員に対し開示を行い、反社会的勢力排除に関する基本方針の徹底を図る。
- ロ. 所轄警察署及び株主名簿管理人等から関連情報を収集し、不測の事態に備え、最新の動向を把握するよう努める。
- ハ. 反社会的勢力に対する対応は管理本部を窓口とし、当社が入手した情報を一元的に統括・管理し、各部署での対応に関する指導・支援を行うとともに、経営に関わる重要な問題として認識した場合には、迅速に経営陣に報告する体制をとっている。

② 内部監査及び監査等委員監査の状況

内部監査については、代表取締役社長の直轄機関として内部監査室を設置し、内部監査室長及び内部監査室長が任命した内部監査担当者により、監査計画に基づいて全部署を対象に定期的に内部監査を実施しております。監査結果は代表取締役社長に報告し、被監査部門に対しては、監査結果について改善事項の指摘や指導を行い、被監査部門からの改善報告によって改善状況を代表取締役社長へ報告しております。

なお、監査計画については、監査等委員と協議の上作成しております。また内部監査の実施の際は、監査等委員の同行もあり効果的な監査を行っております。

監査等委員会は、常勤の監査等委員2名、非常勤の監査等委員3名で構成されており、常勤の監査等委員野沢佳津夫氏は、他社において代表取締役として会社経営の実績があり、会社経営に関する豊富な経験と、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。常勤の監査等委員大塚利百紀氏は、他社において取締役として会社経営の実績があり、会社経営に関する豊富な経験と、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。非常勤の監査等委員寺田正主氏は、弁護士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。非常勤の監査等委員篠崎祥子氏は、他社において代表取締役として会社経営の実績があり、会社経営に関する豊富な経験と、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。非常勤の監査等委員菅波希衣子氏は、他社において取締役社長として会社経営の実績があり、会社経営に関する豊富な経験と、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

また監査等委員全員が東京証券取引所の定めに基づき届け出た独立役員であります。

各監査等委員は監査方針及び監査計画に基づき監査を実施しております。また取締役会に出席し、必要に応じ意見を述べております。常勤の監査等委員は、会社の横断的な主要会議にも出席し、業務の執行状況の把握や意見を述べるとともに、取締役の職務執行を監査しております。

③ 会計監査の状況

当社の会計監査については、PwCあらた有限責任監査法人が監査を実施しております。監査業務を執行した公認会計士の氏名は、以下の通りであります。

指定有限責任社員	業務執行社員	小沢 直靖
指定有限責任社員	業務執行社員	大橋 佳之
監査業務に係る補助者の構成		
公認会計士	7名	その他 19名

④ 社外取締役との関係

当社の社外取締役は5名全員が監査等委員であります。また、監査等委員である取締役5名との間には、人的関係、資本金関係又は取引関係その他の利害関係はありません。

また、社外取締役の選定に際しては、独立性に関する基準または方針を定めておりませんが、東京証券取引所が定める独立役員の独立性に関する判断基準を参考としております。

⑤ 役員報酬等

1. 役員区分ごとの報酬等の総額、及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬額の総額（百万円）	対象となる役員の員数（人）
取締役（監査等委員を除く。） （うち社外取締役）	113 (一)	8 (一)
取締役（監査等委員） （うち社外取締役）	18 (18)	4 (4)
合計 （うち社外役員）	131 (18)	12 (4)

（注）報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人給与は含まれておりません。

2. 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び監査等委員である取締役の報酬等は、株主総会の決議によってそれぞれの総額を決定する旨定款に定めております。各取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬等は、株主総会が決定した報酬等総額の限度内において取締役会の一任を受けた代表取締役が各取締役の職務と責任及び実績に応じて決定することとしております。各監査等委員である取締役の報酬等は、株主総会が決定した報酬等総額の限度内において監査等委員会の協議により決定することとしております。

⑥ 株式の保有状況

1. 当社及び連結子会社のうち、投資株式の貸借対照表計上額（投資株式計上額）が最も大きい会社（最大保有会社）である当社及び最大保有会社の次に投資株式計上額が大きい会社である日経印刷㈱の株式の保有状況については以下のとおりです。

（当社）

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

銘柄数：11 貸借対照表計上額の合計額：463百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

（前事業年度）

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
㈱ウイルコホールディングス	1,200,000	253	取引関係の維持、発展
㈱資生堂	25,000	136	取引関係の維持、発展
東宝㈱	30,000	117	取引関係の維持、発展
㈱レオパレス	100,000	87	取引関係の維持、発展
㈱ライトオン	21,600	20	取引関係の維持、発展
キャノン㈱	150	0	取引関係の維持、発展

（当事業年度）

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
㈱ウイルコホールディングス	1,200,000	127	取引関係の維持、発展
㈱資生堂	16,000	110	取引関係の維持、発展
東宝㈱	30,000	119	取引関係の維持、発展
㈱レオパレス	100,000	43	取引関係の維持、発展
㈱ライトオン	21,600	18	取引関係の維持、発展
㈱サンリオ	1,000	2	取引関係の維持、発展
キャノン㈱	150	0	取引関係の維持、発展

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

ニ. 保有目的を変更した投資株式

該当事項はありません

(日経印刷㈱)

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

銘柄数：4 貸借対照表計上額の合計額：142百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
㈱リンクアンドモチベーション	117,043	107	取引関係の維持、発展
ANAホールディングス㈱	8,672	40	取引関係の維持、発展
三井住友トラスト・ホールディングス㈱	1,600	7	取引関係の維持、発展
キャノン㈱	150	0	取引関係の維持、発展

(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
㈱リンクアンドモチベーション	118,654	100	取引関係の維持、発展
ANAホールディングス㈱	9,070	35	取引関係の維持、発展
三井住友トラスト・ホールディングス㈱	1,600	6	取引関係の維持、発展
キャノン㈱	150	0	取引関係の維持、発展

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

ニ. 保有目的を変更した投資株式

該当事項はありません

⑦ 責任限定契約の内容の概要

当社と監査等委員である取締役の全員は会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を同法第425条第1項に定める最低責任限度額まで限定する責任限定契約を締結しております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該監査等委員が責任の原因となった職務の遂行について、善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

⑧ 取締役の定数

当社の取締役は16名以内とする旨定款に定めております。

⑨ 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めております。また、取締役の選任決議については、累積投票によらないものとする旨を定款で定めております。

⑩ 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

1. 自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、機動的な資本政策等を遂行するため、取締役会の決議によって市場取引等により、自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

2. 取締役の責任免除

当社は、会社法第427条第1項の規定により、取締役会の決議によって、取締役（取締役であった者を含む。）の会社法第423条第1項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

3. 剰余金の配当等の決定機関

当社は、配当については、年4回とすることを基本として、取締役会が都度決定することにしております。
また、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項は、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって定める。」旨定款に定めております。

⑪ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	49	—	56	—
連結子会社	—	—	—	—
計	49	—	56	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としましては、特別な方針等は定めておりませんが、監査公認会計士等が策定した監査計画に基づいて両方で協議し、監査等委員会の同意を得て定めております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年1月1日から2018年12月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年1月1日から2018年12月31日まで）の財務諸表について、PwCあらた有限責任監査法人により監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、情報の入手等に努めております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	6,668	5,558
受取手形及び売掛金	(注)2, (注)5, (注)6 9,912	(注)2, (注)5, (注)6 10,241
電子記録債権	(注)2 889	(注)2 1,528
商品及び製品	658	936
仕掛品	533	749
原材料及び貯蔵品	375	445
繰延税金資産	141	158
短期貸付金	4,301	246
その他	839	1,104
貸倒引当金	△96	△169
流動資産合計	24,223	20,800
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	(注)1, (注)3, (注)7 5,493	(注)1, (注)3, (注)7 6,510
機械装置及び運搬具（純額）	(注)3, (注)7 2,495	(注)3, (注)7 3,243
土地	(注)1, (注)3 9,318	(注)1, (注)3 12,378
建設仮勘定	59	253
その他（純額）	(注)7 347	(注)7 417
有形固定資産合計	17,714	22,803
無形固定資産		
のれん	1,963	83
その他	883	919
無形固定資産合計	2,847	1,003
投資その他の資産		
投資有価証券	(注)4 4,150	(注)4 3,061
繰延税金資産	65	98
その他	1,713	2,372
貸倒引当金	△69	△36
投資その他の資産合計	5,860	5,496
固定資産合計	26,422	29,302
資産合計	50,645	50,102

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	3,310	3,259
短期借入金	(注)1 17,020	(注)1 18,050
1年内返済予定の長期借入金	(注)1 1,480	(注)1 1,717
未払法人税等	816	501
その他	3,362	3,911
流動負債合計	25,988	27,441
固定負債		
長期借入金	(注)1 8,276	(注)1 7,500
繰延税金負債	644	664
退職給付に係る負債	1,680	901
資産除去債務	83	98
その他	1,297	2,524
固定負債合計	11,982	11,688
負債合計	37,971	39,129
純資産の部		
株主資本		
資本金	400	400
資本剰余金	4,899	4,926
利益剰余金	7,073	5,800
自己株式	△40	△1,279
株主資本合計	12,333	9,847
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	268	67
繰延ヘッジ損益	△2	△3
退職給付に係る調整累計額	47	△0
その他の包括利益累計額合計	314	62
非支配株主持分	27	1,063
純資産合計	12,674	10,973
負債純資産合計	50,645	50,102

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高	36,393	51,145
売上原価	25,702	36,645
売上総利益	10,691	14,500
販売費及び一般管理費	(注)1 9,280	(注)1 12,888
営業利益	1,410	1,612
営業外収益		
受取利息	8	15
受取配当金	11	31
持分法による投資利益	20	—
助成金収入	—	52
その他	153	160
営業外収益合計	194	261
営業外費用		
支払利息	85	113
持分法による投資損失	—	384
貸倒引当金繰入額	—	100
支払手数料	195	—
その他	25	41
営業外費用合計	306	638
経常利益	1,298	1,234
特別利益		
固定資産売却益	(注)2 30	(注)2 28
負ののれん発生益	794	271
その他	30	97
特別利益合計	855	397
特別損失		
固定資産売却損	(注)3 3	(注)3 1
固定資産除却損	(注)4 12	(注)4 42
減損損失	(注)5 78	(注)5 1,407
段階取得に係る差損	—	169
退職給付制度終了損	—	233
その他	38	24
特別損失合計	133	1,879
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	2,020	△246
法人税、住民税及び事業税	825	676
法人税等調整額	△71	△34
法人税等合計	753	642
当期純利益又は当期純損失(△)	1,267	△888
非支配株主に帰属する当期純利益	15	71
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)	1,251	△959

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
当期純利益又は当期純損失 (△)	1,267	△888
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	177	△203
繰延ヘッジ損益 (税引前)	△2	△1
退職給付に係る調整額	46	△48
持分法適用会社に対する持分相当額	—	0
その他の包括利益合計	(注) 221	(注) △253
包括利益	1,488	△1,142
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,472	△1,211
非支配株主に係る包括利益	16	69

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	400	3,101	6,091	△702	8,890
当期変動額					
剰余金の配当			△269		△269
親会社株主に帰属する当期純利益			1,251		1,251
自己株式の取得				△279	△279
自己株式の処分		85		226	311
合併による増加		1,596		478	2,074
株式交換による増加		80		237	318
連結子会社株式の取得による持分の増減		35			35
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					—
当期変動額合計	—	1,798	981	662	3,442
当期末残高	400	4,899	7,073	△40	12,333

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	91	—	1	92	108	9,090
当期変動額						
剰余金の配当						△269
親会社株主に帰属する当期純利益						1,251
自己株式の取得						△279
自己株式の処分						311
合併による増加						2,074
株式交換による増加						318
連結子会社株式の取得による持分の増減	97			97	△80	52
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	80	△2	46	124	—	124
当期変動額合計	177	△2	46	221	△80	3,584
当期末残高	268	△2	47	314	27	12,674

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	400	4,899	7,073	△40	12,333
当期変動額					
剰余金の配当			△308		△308
親会社株主に帰属する当期純損失（△）			△959		△959
自己株式の取得				△1,258	△1,258
自己株式の処分		26		18	45
連結子会社による非連結子会社の合併に伴う増減			△4		△4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					—
当期変動額合計	—	26	△1,272	△1,239	△2,485
当期末残高	400	4,926	5,800	△1,279	9,847

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	268	△2	47	314	27	12,674
当期変動額						
剰余金の配当						△308
親会社株主に帰属する当期純損失（△）						△959
自己株式の取得						△1,258
自己株式の処分						45
連結子会社による非連結子会社の合併に伴う増減						△4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△201	△1	△48	△251	1,035	784
当期変動額合計	△201	△1	△48	△251	1,035	△1,701
当期末残高	67	△3	△0	62	1,063	10,973

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	2,020	△246
減価償却費	1,151	1,733
減損損失	78	1,407
のれん償却額	419	482
貸倒引当金の増減額(△は減少)	△55	23
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	70	△1,032
受取利息及び受取配当金	△19	△47
支払利息	85	113
持分法による投資損益(△は益)	△20	384
固定資産売却損益(△は益)	△27	△27
固定資産除却損	12	42
負ののれん発生益	△794	△271
段階取得に係る差損益(△は益)	—	169
売上債権の増減額(△は増加)	△152	711
たな卸資産の増減額(△は増加)	84	△143
仕入債務の増減額(△は減少)	△232	△276
その他	300	233
小計	2,920	3,255
利息及び配当金の受取額	21	47
利息の支払額	△86	△122
法人税等の支払額	△225	△898
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,629	2,282
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△954	△3,793
有形固定資産の売却による収入	111	201
無形固定資産の取得による支出	△30	△86
連結の範囲の変更を伴う 子会社株式の取得による支出	(注)2 △3,305	—
連結の範囲の変更を伴う 子会社株式の取得による収入	—	(注)2 694
投資有価証券の取得による支出	△2,003	△310
投資有価証券の売却による収入	313	315
貸付けによる支出	△7,929	△641
貸付金の回収による収入	2,387	1,670
その他	△149	27
投資活動によるキャッシュ・フロー	△11,560	△1,924

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（△は減少）	8,155	972
長期借入れによる収入	9,054	2,000
長期借入金の返済による支出	△3,685	△2,489
設備関係割賦債務の返済による支出	△276	△452
自己株式の売却による収入	311	45
自己株式の取得による支出	△279	△1,258
配当金の支払額	△272	△311
連結の範囲の変更を伴わない 子会社株式の取得による支出	△137	—
その他	△3	△3
財務活動によるキャッシュ・フロー	12,866	△1,497
現金及び現金同等物に係る換算差額	△0	—
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	3,935	△1,138
現金及び現金同等物の期首残高	2,598	6,663
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	△72	—
非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の 増加額	(注)2, (注)3 202	(注)3 25
現金及び現金同等物の期末残高	(注)1 6,663	(注)1 5,550

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 26社

連結子会社の名称

東京リスマチック株式会社
日経印刷株式会社
株式会社美松堂
田中産業株式会社※
株式会社MG S※
宏和樹脂工業株式会社
株式会社エム・ピー・ビー
株式会社キャドセンター
クラウドゲート株式会社
株式会社エグゼクション
株式会社ソニックジャム
株式会社ポパル
株式会社アスティ

ダンサイエンス株式会社
株式会社プレシーズ
サンエーカガク印刷株式会社
プリンティングイン株式会社
成旺印刷株式会社
株式会社大熊整美堂
株式会社サカモト
株式会社コロレー
株式会社エヌビー社
株式会社あみューズ
株式会社メディコス・エンタテインメント
明和物産株式会社
日経土地株式会社

※ 2018年6月26日付の田中産業株式会社の第三者割当増資引受により、同社及び同社の子会社である株式会社MG Sが連結子会社となりました。

(2) 非連結子会社の名称

株式会社FIVESTARinteractive
株式会社キョーコロ
株式会社ハルプロモーション
株式会社マーケティングディレクションズ
カタオカプロセス株式会社※1
株式会社マイクログローブ

株式会社P l a y c e
キッズプランニング株式会社
株式会社ジー・ワン
株式会社ビアンコ
株式会社ポパルプロダクツ
株式会社ハロー・ワールド

※1 2018年4月18日付の株式取得により子会社となりました。

※2 2018年8月1日を効力発生日として、クラウドゲート株式会社を存続会社とする吸収合併によりクラウドゲームス株式会社及び株式会社C r e a p l eは消滅しております。

※3 2018年9月1日を効力発生日として、宏和樹脂工業株式会社を存続会社とする吸収合併により株式会社コーワクリエイティブは消滅しております。

※4 2018年12月26日付の株式譲渡により、索嘉信息技术(上海)有限公司は子会社ではなくなりました。

(3) 連結範囲から除いた理由

非連結子会社は、いずれも小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社数 12社

会社の名称

株式会社FIVESTARinteractive
株式会社キョーコロ
株式会社ハルプロモーション
株式会社マーケティングディレクションズ
カタオカプロセス株式会社※1
株式会社マイクログローブ

株式会社P l a y c e
キッズプランニング株式会社
株式会社ジー・ワン
株式会社ビアンコ
株式会社ポパルプロダクツ
株式会社ハロー・ワールド

※1 当連結会計年度において、新たに持分法適用の非連結子会社となりました。

※2 2018年8月1日を効力発生日として、クラウドゲート株式会社を存続会社とする吸収合併によりクラウドゲームス株式会社及び株式会社C r e a p l eは消滅したため、持分法適用の範囲から除外しております。

(2) 持分法適用の関連会社数 4社

会社の名称

株式会社イメージ・マジック

NR I フィナンシャル・グラフィックス株式会社

株式会社アルファコード

株式会社サイバーネット

※ 田中産業株式会社及び株式会社MG Sは、2018年6月26日付で田中産業株式会社の第三者割当増資引受により、連結子会社となったため、持分法適用の範囲から除外しております。

(3) 持分法を適用していない関係会社

会社の名称

(関連会社)

株式会社ランスロットグラフィックデザイン

株式会社SO-KEN

株式会社Five for

※1 2018年9月1日を効力発生日として、宏和樹脂工業株式会社を存続会社とする吸収合併により株式会社コーワクリエイティブは消滅いたしました。

※2 2018年12月26日付の株式譲渡により、索嘉信息技术(上海)有限公司は子会社ではなくなりました。

(4) 持分法を適用していない理由

各社の当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

(5) 持分法の適用の手続について特に記載する必要があると認められる事項

株式会社イメージ・マジックの決算日は4月末日であり、連結会計年度の末日と異なるため、2018年10月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

株式会社アルファコードの決算日は3月末日であり、連結会計年度の末日と異なるため、2018年12月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

株式会社サイバーネットの決算日は1月末日であり、連結会計年度の末日と異なるため、2018年10月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結会計年度の末日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

イ. 時価のあるもの

連結会計年度末の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理、売却原価は移動平均法により算定)

ロ. 時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、匿名組合出資金については、その損益のうち、当社に帰属する持分相当額を営業外損益に計上するとともに、「投資有価証券」を加減する方法

② たな卸資産

イ. 商品・製品・原材料・仕掛品

主として総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

ただし一部の連結子会社においては個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)及び移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)を採用しております。

ロ. 貯蔵品

最終仕入原価による原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。

ただし、1998年4月1日以降取得した建物(建物附属設備は除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりです。

建物 10年～50年

機械装置 2年～12年

また、取得金額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等償却する方法によっております。

- ② 無形固定資産（リース資産を除く）
イ. 市場販売目的のソフトウェアは、見込販売可能期間（３年）に基づく定額法を採用しております。
ロ. 自社利用のソフトウェアは、利用可能期間（５年）に基づく定額法を採用しております。
- ③ リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。
- (3) 重要な引当金の計上基準
貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。
- (4) 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算にあたり、一部の連結子会社では原則法を適用し、また、一部の連結子会社では簡便法を適用しております。
- ① 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。
- ② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法
数理計算上の差異は、その発生時の翌連結会計年度に一括費用処理しております。また、過去勤務費用は発生年度に一括費用処理しております。
- ③ 小規模企業等における簡便法の採用
簡便法を適用する連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算において、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法をとっております。
- (5) 重要な収益及び費用の計上基準
完成工事高及び完成工事原価の計上基準
一部の連結子会社においては、当連結会計年度までに着手した受注製作のソフトウェア開発契約について、当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる契約については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の契約については工事完成基準（検収基準）を適用しております。
- (6) のれんの償却方法及び償却期間
のれん償却については、発生の都度、子会社の実態に基づいて償却期間を見積り、１年～15年の年数で均等償却しております。
- (7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から３ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。
- (8) その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項
消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当連結会計年度の費用として処理しております。

（未適用の会計基準等）

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第28号 平成30年２月16日改正 企業会計基準委員会）
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成30年２月16日最終改正 企業会計基準委員会）

(1) 概要

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等は、日本公認会計士協会における税効果会計に関する実務指針を企業会計基準委員会に移管するに際して、基本的にその内容を踏襲した上で、必要と考えられる以下の見直しが行われたものであります。

（会計処理の見直しを行った主な取扱い）

- ・個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱い
- ・（分類１）に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱い

(2) 適用予定日

2019年12月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」（IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606）を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、摘要指針と合わせて公表されたものです。企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年12月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、

（表示方法の変更）

（連結損益計算書）

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「営業外収益」の「投資事業組合運用益」及び「匿名組合投資利益」は、金額の重要性が低下したため、当連結会計年度においては「営業外収益」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替を行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において「営業外収益」の「投資事業組合運用益」に表示していた13百万円及び「匿名組合投資利益」に表示していた20百万円は、「その他」として組み替えております。

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「特別損失」の「投資有価証券評価損」は、当連結会計年度においては発生していないため、「特別損失」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替を行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において「特別損失」の「投資有価証券評価損」に表示していた26百万円は、「その他」として組み替えております。

（連結キャッシュ・フロー計算書）

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「営業キャッシュ・フロー」の「投資事業組合運用損益」「匿名組合投資損益」「投資有価証券売却損益」「破産更生債権等の増減額」は、金額の重要性が低下したため、当連結会計年度においては「営業キャッシュ・フロー」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業キャッシュ・フロー」の「投資事業組合運用損益」に表示していた△13百万円、「匿名組合投資損益」に表示していた△20百万円、「投資有価証券売却損益」に表示していた△11百万円、「破産更生債権等の増減額」に表示していた17百万円は、「その他」として組み替えております。

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「投資キャッシュ・フロー」の「敷金及び保証金の回収による収入」は、金額の重要性が低下したため、当連結会計年度においては「投資キャッシュ・フロー」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「投資キャッシュ・フロー」の「敷金及び保証金の回収による収入」に表示していた11百万円は、「その他」として組み替えております。

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「財務キャッシュ・フロー」の「リース債務の返済による支出」は、金額の重要性が低下したため、当連結会計年度においては「財務キャッシュ・フロー」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務キャッシュ・フロー」の「リース債務の返済による支出」に表示していた△3百万円は、「その他」として組み替えております。

(追加情報)

1. 従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引

当社は、グループの従業員に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生増進策として、持株会の拡充を通じて従業員の株式取得及び保有を促進することにより従業員の財産形成を支援することを目的として、「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」（以下「本プラン」といいます。）を導入、2012年1月30日付でE-Ship信託契約を締結し継続してまいりましたが、2018年4月10日にて、信託期間満了となり終了いたしました。

(1) 取引の概要

本プランは、当社が信託銀行に従業員持株会専用信託（以下「従持信託」といいます。）を設定し、従持信託は信託期間内で当社持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を一括取得し、その後は、従持信託から当社持株会に当社株式の売却を継続的に行ってまいりました。

当社株式の取得及び処分については、当社が従持信託の債務を保証しているため、経済的実態を重視し、当社と従持信託は一体であるとする会計処理をしております。

従いまして、従持信託が所有する当社株式や従持信託の資産及び負債並びに費用及び収益については、連結貸借対照表、連結損益計算書及び連結包括利益計算書に含めて計上しております。

(2) 信託を通じて自社の株式を交付する取引に関する会計処理

「従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引に関する実務上の取扱い」（実務対応報告第30号 平成27年3月26日）第20項を適用し、従来採用していた方法を継続しております。

(3) 信託が保有する自社の株式に関する事項

本プランは、2018年4月10日にて、信託期間満了となり終了し、当連結会計年度末において従持信託が保有する当社株式はなくなりました。

また、従持信託が保有する当社株式の当連結会計年度における期中平均株式数は22千株であり、1株当たり情報の算出上、控除する自己株式に含めております。

2. 退職給付制度の廃止

当連結会計年度において、当社及び一部の連結子会社において、退職金制度を廃止いたしました。これに伴い特別損失に退職給付制度終了損233百万円の計上を行っております。

(連結貸借対照表関係)

(注) 1. 担保に供されている資産及びこれに対応する債務

(1) 担保に供されている資産

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
建物及び構築物	4,587百万円	4,538百万円
土地	8,233	10,410
計	12,820	14,949

(2) 上記に対応する債務

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
長期借入金	8,175百万円	7,500百万円
1年内返済予定の長期借入金	1,472	1,716
短期借入金	13,000	14,000
計	22,647	23,216

前連結会計年度においては、抵当権設定総額2,000百万円(当該対応資産2,905百万円、当該対応債務は1年内返済予定の長期借入金400百万円、長期借入金3,500百万円)及び根抵当権設定総額15,255百万円(当該対応資産9,914百万円、当該対応債務は1年内返済予定の長期借入金1,072百万円、長期借入金4,675百万円及び短期借入金13,000百万円)であります。

当連結会計年度においては、抵当権設定総額2,000百万円(当該対応資産2,843百万円、当該対応債務は1年内返済予定の長期借入金400百万円、長期借入金3,100百万円)及び根抵当権設定総額12,220百万円(当該対応資産12,105百万円、当該対応債務は1年内返済予定の長期借入金1,316百万円、長期借入金4,400百万円及び短期借入金14,000百万円)であります。

(注) 2. 連結会計年度末日満期手形及び電子記録債権の処理方法

連結会計年度末日満期手形及び電子記録債権は、手形交換日をもって決済処理をしております。連結会計年度末日は、銀行休業日のため、次の連結会計年度末日満期手形及び電子記録債権が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
受取手形	57百万円	135百万円
電子記録債権	22	14

(注) 3. 有形固定資産には、以下の休止固定資産が含まれております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
建物及び構築物	4百万円	4百万円
機械装置及び運搬具	0	0
土地	62	62
計	66	66

(注) 4. 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
投資有価証券(株式)	2,452百万円	1,741百万円

(注) 5. 手形譲渡契約に基づく債権流動化を行っております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
受取手形譲渡残高	306百万円	213百万円

(注) 6. 受取手形割引高及び受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
受取手形割引高	24百万円	6百万円
受取手形裏書譲渡高	9	6

(注) 7. 有形固定資産に対する減価償却累計額は次のとおりであります。

減価償却累計額には減損損失累計額が含まれております。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
減価償却累計額	23,595百万円	27,581百万円

(連結損益計算書関係)

(注) 1. 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
運搬費	801百万円	1,679百万円
給与及び手当	3,286	4,383
法定福利費	664	840

(注) 2. 固定資産売却益の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
建物及び構築物	3百万円	1百万円
機械装置及び運搬具	5	3
土地	20	22
その他	0	—
計	30	28

(注) 3. 固定資産売却損の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
機械装置及び運搬具	3百万円	1百万円
計	3	1

(注) 4. 固定資産除却損の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
建物及び構築物	3百万円	7百万円
機械装置及び運搬具	0	33
その他	8	1
計	12	42

(注) 5. 減損損失

前連結会計年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

減損損失は、「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（日本公認会計士協会 平成26年11月28日会計制度委員会報告第7号）第32項の規定に基づき、連結子会社株式の減損処理に伴って、のれんを償却したものであります。

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

用途	種類	場所	減損損失
—	のれん	—	1,403百万円

当社企業グループは、原則として、報告セグメントを基準としてグルーピングを行っております。なお、のれんについては独立したキャッシュ・フローを生み出す最小単位として事業会社単位を基準としており、遊休資産については、個別資産を基準としてグループ化を行っております。

上記のれんにおいては、一部の連結子会社において、収益力及び今後の事業計画を検討した結果、想定していた収益が見込めなくなったことから、のれんの未償却残高を減損処理いたしました。

なお、のれんの回収可能価額は、使用価値を零として評価しております。

また、上記以外の減損損失につきましては、重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(連結包括利益計算書関係)

(注) その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	207百万円	△179百万円
組替調整額	43	△59
税効果調整前	251	△238
税効果額	△73	35
その他有価証券評価差額金	177	△203
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	△3	△2
組替調整額	2	—
税効果調整前	△1	△2
税効果額	△0	0
繰延ヘッジ損益	△2	△1
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	47	△1
組替調整額	△1	△47
税効果調整前	46	△48
税効果額	—	0
退職給付に係る調整額	46	△48
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	—	0
組替調整額	—	—
持分法適用会社に対する持分相当額	—	0
その他の包括利益合計	221	△253

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	12,187,280	1,630,654	—	13,817,934
合計	12,817,280	1,630,654	—	13,817,934
自己株式				
普通株式	1,249,212	348,176	1,496,616	100,772
合計	1,249,212	348,176	1,496,616	100,772

- (注) 1. 普通株式の増加は、2017年12月31日効力発生のグラフィックグループ株式会社との吸収合併に伴う新株交付であります。
2. 普通株式の自己株式の増加は、会社法第165条第2項の規定による定款の定めに基づく自己株式の取得347,900株及び単元未満株式の買取請求276株であります。
3. 普通株式の自己株式の減少は、株式会社ウイлкоホールディングスを引受先とする第三者割当による自己株式の処分258,700株、株式会社あみューズとの株式交換による自己株式の処分205,040株、宏和樹脂工業株式会社との株式交換による自己株式の処分186,000株、及びグラフィックグループ株式会社との吸収合併に伴う自己株式の処分674,876株、並びに従業員持株会専用信託による自己株式の処分172,000株であります。
4. 普通株式の自己株式の株式数は、従業員持株会専用信託が保有する当社株式(当連結会計年度期首272,700株当連結会計年度末100,700株)を含めております。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年2月10日 取締役会(注)	普通株式	65	6.00	2016年12月31日	2017年3月31日
2017年5月11日 取締役会(注)	普通株式	65	6.00	2017年3月31日	2017年5月26日
2017年8月14日 取締役会(注)	普通株式	67	6.00	2017年6月30日	2017年9月26日
2017年11月10日 取締役会(注)	普通株式	70	6.00	2017年9月30日	2017年11月27日

(注) 配当金の総額には、従業員持株会専用信託に対する配当金を含めておりません。これは、従業員持株会専用信託が保有する当社株式を自己株式として認識しているためであります。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年2月14日 取締役会	普通株式	82	利益剰余金	6.00	2017年12月31日	2018年3月30日

(注) 配当金の総額には、従業員持株会専用信託に対する配当金を含めておりません。これは、従業員持株会専用信託が保有する当社株式を自己株式として認識しているためであります。

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	13,817,934	—	—	13,817,934
合計	13,817,934	—	—	13,817,934
自己株式				
普通株式	100,772	1,255,064	46,700	1,309,136
合計	100,772	1,255,064	46,700	1,309,136

（注） 1. 普通株式の自己株式の増加は、会社法第165条第2項の規定による定款の定めに基づく自己株式の取得1,255,000株及び単元未満株式の買取請求64株であります。

2. 普通株式の自己株式の減少は、従業員持株会専用信託による自己株式の処分46,700株であります。

3. 普通株式の自己株式の株式数は、従業員持株会専用信託が保有する当社株式(当連結会計年度期首100,700株当連結会計年度末一株)を含めております。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2018年2月14日 取締役会（注）	普通株式	82	6.00	2017年12月31日	2018年3月30日
2018年5月11日 取締役会（注）	普通株式	75	6.00	2018年3月31日	2018年5月28日
2018年8月13日 取締役会	普通株式	75	6.00	2018年6月30日	2018年9月26日
2018年11月9日 取締役会	普通株式	75	6.00	2018年9月30日	2018年11月27日

（注）配当金の総額には、従業員持株会専用信託に対する配当金を含めておりません。これは、従業員持株会専用信託が保有する当社株式を自己株式として認識しているためであります。なお、従業員持株会信託は、2018年4月10日にて信託期間満了となり終了いたしました。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年2月13日 取締役会	普通株式	75	資本剰余金	6.00	2018年12月31日	2019年3月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

(注) 1. 現金及び現金同等物の連結会計年度末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
現金及び預金勘定	6,668百万円	5,558百万円
別段預金	△4	△8
現金及び現金同等物	6,663	5,550

(注) 2. 株式取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

株式の取得により株式会社ダンホールディングス及びその子会社ダンサイエンス株式会社他2社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	671百万円
固定資産	480
のれん	296
流動負債	△807
固定負債	△58
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	583
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△134
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	△455

非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額 6

(注) 株式会社ダンホールディングスは2017年3月31日を効力発生日として当社が吸収合併いたしましたので、「新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高」6百万円は、「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」へ振替えて表示しております。

株式の取得及び株式交換により株式会社あみューズを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う支出(純額)との関係は次のとおりであります。

流動資産	490百万円
固定資産	25
のれん	372
流動負債	△450
固定負債	△0
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	436
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△280
株式交換による株式の発行価額	△167
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	11

株式の取得及び株式交換により宏和樹脂工業株式会社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	433百万円
固定資産	1,178
負ののれん	△64
流動負債	△805
固定負債	△201
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	539
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△208
株式交換による株式の交付額	△151
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	△179

株式の取得により株式会社エヌビー社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	499百万円
固定資産	146
負ののれん	△52
流動負債	△260
固定負債	△5
非支配株主持分	△76
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	252
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△175
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	△76

株式の取得によりグラフィックグループ株式会社及びその子会社日経印刷他1社を連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	4,924百万円
固定資産	5,822
負ののれん	△677
流動負債	△1,504
固定負債	△1,783
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	6,781
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△2,166
合併による株式の割当価額	△2,074
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	△2,603
非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	63

（注）グラフィックグループ株式会社は2017年12月31日を効力発生日として当社が吸収合併いたしましたので、「新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高」63百万円は、「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」へ振替えて表示しております。

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

株式の取得により田中産業株式会社及び同社子会社の株式会社MGSを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得に伴う収入（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	3,511百万円
固定資産	4,890
負ののれん	△271
流動負債	△4,024
固定負債	△1,830
非支配株主持分	△966
株式取得による新規連結子会社株式の取得価額	1,308
支配獲得時までの既取得価格	△658
新規連結子会社の現金及び現金同等物の残高	△1,344
差引：連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	694

（注）3. 重要な非資金取引の内容

合併した会社により承継した資産及び負債の主な内訳

前連結会計年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

当連結会計年度に株式会社サカモトが合併した株式会社MACスタイルより承継した資産及び負債の主な内訳は次のとおりであります。

流動資産	75百万円
固定資産	9
資産合計	84
流動負債	46
固定負債	—
負債合計	46

（注）現金及び現金同等物が29百万円含まれており、連結キャッシュ・フロー計算書において「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」として表示しております。

当連結会計年度に株式会社エヌビー社が合併したフォロン株式会社より承継した資産及び負債の主な内訳は次のとおりであります。

流動資産	120百万円
固定資産	1
資産合計	122
流動負債	11
固定負債	—
負債合計	11

（注）現金及び現金同等物が104百万円含まれており、連結キャッシュ・フロー計算書において「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」として表示しております。

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

当連結会計年度に株式会社クラウドゲートが合併したクラウドゲームス株式会社より承継した資産及び負債の主な内訳は次のとおりであります。

流動資産	45百万円
固定資産	22
資産合計	67
流動負債	81
固定負債	—
負債合計	81

（注）現金及び現金同等物が18百万円含まれており、連結キャッシュ・フロー計算書において「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」として表示しております。

当連結会計年度に株式会社クラウドゲートが合併した株式会社C r e a p l eより承継した資産及び負債の主な内訳は次のとおりであります。

流動資産	26百万円
固定資産	—
資産合計	26
流動負債	0
固定負債	—
負債合計	0

（注）現金及び現金同等物が6百万円含まれており、連結キャッシュ・フロー計算書において「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」として表示しております。

当連結会計年度に宏和樹脂工業株式会社が合併した株式会社コーワクリエイティブより承継した資産及び負債の主な内訳は次のとおりであります。

流動資産	0百万円
固定資産	—
資産合計	0
流動負債	7
固定負債	—
負債合計	7

（注）現金及び現金同等物が0百万円含まれており、連結キャッシュ・フロー計算書において「非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額」として表示しております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社企業グループは、資金運用については預金等の安全性の高い金融資産で行い、資金調達については銀行借入による方針であります。

また、当社企業グループでは、全体の資金効率を高めるためにCMS(キャッシュ・マネジメント・システム)を導入し、必要資金については当社が銀行等金融機関から調達し、各社ごとの余剰資金と合わせてグループ全体で運用しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権、短期貸付金は、顧客の信用リスクにさらされております。当該リスクに関しては、与信及び債権管理規程に沿ってリスク低減を図っております。

投資有価証券に係る市場リスクは、有価証券管理規程に沿ってリスク低減を図っております。

営業債務である買掛金は、そのほとんどが末日締の35日後の支払期日であります。また、運転資金として短期借入金を利用しております。

長期借入金は主に設備投資に係る資金調達であります。返済日は最長で決算日から8年後であります。

法人税、住民税(都道府県民税及び市町村民税をいう。)及び事業税の未払額である未払法人税等は、その全てが2ヶ月以内に納付期限が到来するものであります。

当社企業グループではCMSを導入しており、グループ全体で資金運用を行っております。資金調達に係る流動性リスクについては、当社が各社からの報告に基づいて、適時に資金繰計画を作成・更新することにより管理しております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません(注)2.参照)。

前連結会計年度(2017年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	6,668	6,668	—
(2) 受取手形(電子記録債権を含む)及び 売掛金	10,801		
貸倒引当金(※1)	△96		
	10,705	10,705	—
(3) 短期貸付金	4,301	4,301	—
(4) 投資有価証券	1,137	1,137	—
(5) 破産債権、更生債権等	69		
貸倒引当金(※1)	△69		
	—	—	—
資産計	22,820	22,820	—
(1) 買掛金	3,310	3,310	—
(2) 短期借入金	17,020	17,020	—
(3) 未払法人税等	816	816	—
(4) 長期借入金(1年内返済予定を含む)	9,756	9,756	△0
負債計	30,903	30,903	△0

(※1)それぞれの債権に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

当連結会計年度（2018年12月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	5,558	5,558	—
(2) 受取手形（電子記録債権を含む）及び 売掛金	11,770		
貸倒引当金（※1）	△69		
	11,700	11,700	—
(3) 短期貸付金	246		
貸倒引当金（※1）	△100		
	146	146	—
(4) 投資有価証券	955	955	—
資産計	18,360	18,360	—
(1) 買掛金	3,259	3,259	—
(2) 短期借入金	18,050	18,050	—
(3) 未払法人税等	501	501	—
(4) 長期借入金（1年内返済予定を含む）	9,217	9,217	△0
負債計	31,029	31,028	△0

（※1）それぞれの債権に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

（注） 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形（電子記録債権を含む）及び売掛金、(3) 短期貸付金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

負 債

(1) 買掛金、(2) 短期借入金、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期借入金（1年以内返済予定を含む）

これらの時価は、元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

（単位：百万円）

区分	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
非上場株式	48	76
投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資金	511	288
関係会社株式（非上場株式）	2,452	1,741

非上場株式、関係会社株式（非上場株式）については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資金については、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されていることから、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

３．金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度（2017年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	6,668	—	—	—
受取手形（電子記録債権を含む）及び 売掛金	10,801	—	—	—
投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの	322	196	98	—
破産債権、更生債権等	69	—	—	—
合計	17,862	196	98	—

当連結会計年度（2018年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	5,558	—	—	—
受取手形（電子記録債権を含む）及び 売掛金	11,770	—	—	—
投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの	94	191	96	—
合計	17,488	191	96	—

４．長期借入金の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度（2017年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	17,020	—	—	—	—	—
長期借入金	1,480	1,573	956	956	956	3,835
合計	18,500	1,573	956	956	956	3,835

当連結会計年度（2018年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	18,050	—	—	—	—	—
長期借入金	1,717	1,200	1,200	1,200	900	3,000
合計	19,767	1,200	1,200	1,200	900	3,000

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (2017年12月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,031	657	374
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	105	105	—
	小計	1,137	762	374
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		1,137	762	374

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額48百万円)、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資金 (連結貸借対照表計上額511百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2018年12月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	454	187	266
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	454	187	266
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	406	518	△112
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	94	105	△10
	小計	501	624	△123
合計		955	812	143

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額76百万円)、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資金 (連結貸借対照表計上額288百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	177	11	—
(2) 債券	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	177	11	—

当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	88	69	—
(2) 債券	—	—	—
(3) その他	201	1	—
合計	289	71	—

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、確定給付型の制度として退職一時金制度を設けており、確定拠出型の制度として確定拠出年金制度を設けております。

なお、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算にあたり、一部の連結子会社では原則法を適用し、また、一部の連結子会社では簡便法を適用しております。

また、当連結会計年度において、退職一時金制度を設けておりました会社の内、当社と連結子会社を含め計11社が退職給付制度を廃止いたしました。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
退職給付債務の期首残高	532百万円	1,169百万円
勤務費用	124	173
利息費用	1	2
数理計算上の差異の発生額	△47	1
制度変更による減少	△51	—
制度廃止による減少	—	△581
新規連結による増加	677	—
退職給付の支払額	△68	△60
退職給付債務の期末残高	1,169	704

(2) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
勤務費用	124百万円	173百万円
利息費用	1	2
期待運用収益	—	—
数理計算上の差異の費用処理額	△1	△47
過去勤務費用の費用処理額	—	—
確定給付制度に係る退職給付費用	125	128

(3) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
過去勤務費用	—百万円	—百万円
数理計算上の差異	47	△1
合 計	47	△1

(4) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
未認識過去勤務費用	－百万円	－百万円
未認識数理計算上の差異	△1	△47
合 計	△1	△47

(5) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
割引率	0.27135%	0.19840%

3. 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	447百万円	511百万円
退職給付費用	77	15
制度廃止による減少	－	△506
退職給付の支払額	△12	△27
新規連結による増加	－	204
退職給付に係る負債の期末残高	511	196

(2) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度 77百万円 当連結会計年度 15百万円

4. 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度19百万円、当連結会計年度16百万円であります。

（ストック・オプション等関係）

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
繰延税金資産（流動）		
貸倒引当金損金算入限度超過額	73百万円	217百万円
未払事業税	76	26
未払事業所税	18	19
棚卸資産評価損	74	91
税務上の繰越欠損金	28	—
その他	3	31
小計	275	385
評価性引当額	△153	△235
繰延税金資産（流動）合計	121	149
繰延税金負債（流動）		
差額負債調整勘定	△0	—
その他	—	△0
繰延税金負債（流動）合計	△0	△0
繰延税金資産（流動）の純額	120	149
繰延税金資産（固定）		
退職給付に係る負債	613	311
貸倒損失自己否認	22	12
減損損失	482	649
投資有価証券評価損	97	184
資産除去債務	48	56
長期未払費用	65	—
長期未払金	126	485
税務上の繰越欠損金	1,038	1,106
その他	24	1
小計	2,519	2,809
評価性引当額	△1,794	△2,183
繰延税金資産（固定）合計	724	625
繰延税金負債（固定）		
特別償却準備金	△625	△472
その他有価証券評価差額金	△192	△102
圧縮積立金	△36	△47
固定資産等評価差額金	△447	△569
その他	△0	—
繰延税金負債（固定）合計	△1,303	△1,192
繰延税金負債（固定）の純額	△578	△566

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2017年12月31日)	当連結会計年度 (2018年12月31日)
法定実効税率	30.9%	税金等調整前当期純損失であるため、記載を省略しております。
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.7	
住民税均等割	0.8	
のれん償却額	6.4	
のれんの減損額	1.2	
負ののれん発生益	△12.2	
持分法による投資損益	△0.3	
評価性引当金増減	6.3	
法人税率変更差異	3.6	
その他	△0.1	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	37.3	

(企業結合等関係)

(取得による企業結合)

取得による田中産業株式会社の完全子会社化

当社は、2018年6月26日開催の取締役会において、持分法適用関連会社でありました田中産業株式会社（以下、「田中産業」といいます。）の実施する第三者割当増資の全てを引き受けることを決議し、同日付で田中産業の株式を取得し、田中産業及び同社子会社の株式会社MG S（以下、「MG S」といいます。）を連結子会社といたしました。

(1) 企業結合の概要

① 被取得企業の名称及び事業内容

(田中産業)

被取得企業の名称 田中産業株式会社

事業内容：各種印刷及び付随する紙器加工他

- ・印刷用フィルムシートの製造
- ・大型印刷（ビルボード・駅貼りポスター・宣伝用バナー 等）
- ・厚紙印刷（パッケージ・トレーディングカード、POP 等）
- ・特殊紙印刷（フィルム印刷・レンチキュラー印刷・メタル紙印刷 等）
- ・金属印刷（ブリキ材等金属素材）
- ・シルクスクリーン印刷（点字・盛り上げ・表面加飾・スクラッチカード・絵本 等）
- ・加工（クリアファイル・クリアパッケージ等の抜き貼り、断裁、表面加工 等）

(MG S)

被取得企業の名称：株式会社MG S

事業内容：金属容器、プラスチック容器、紙・プラスチック容器の企画・製造・販売

② 企業結合を行った理由

田中産業は、国内最大のB倍超(菊4倍)サイズ大判オフセット印刷、大型タペストリーや懸垂幕・垂れ幕・等身大ポスターなどの製造、3Dレンチキュラーレンズやメタル紙への特殊印刷、クリアファイルやパッケージ製作、ブリキ材等金属素材への金属印刷を主なサービスとして提供しております。また、田中産業の子会社であるMG Sは、オリジナル缶（菓子容器・ペンケース・トランクケース、ディスクケースなど）の企画・製造を行っており、主要テーマパークや有力菓子メーカーなどから品質要求度が高く、特色のあるオリジナルデザイン缶の受注製造を主に行っております。

一方、当社企業グループは、クリエイティブサービスを事業とし、お客様が創造性（クリエイティブ）を表現するために必要である多様なソリューションを提供するため、「クリエイティブをサポートする企業集団」として、幅広いビジネスを積極的に展開、推進しており、汎用的な一般情報紙への印刷にとどまらずに、特殊素材・立体物への印刷に加え、多岐にわたる「カタチあるモノ」、例えばノベルティ・フィギュア・3Dプリンター造形など、またデジタルコンテンツなどのソリューションの提供を行っております。

当社と田中産業とは2016年11月1日付で包括的業務提携契約を締結いたしました。その後、3社が保有する製造設備や、製造管理技術、印刷技術などの経営資源の融合発展を進め、製造効率の向上、品質の向上、ワンストップサービスの拡充など、お客様のご要望への対応力を向上させることで、田中産業、MG S及び当社企業グループの企業価値の一層の向上を実現させることを目的として、2017年10月5日付にて当社が田中産業の株式の一部を取得、またMG Sの第三者割当増資を当社が引受、両社を持分法適用関連会社といたしました。

今回、田中産業の第三者割当増資を引受け、田中産業及びMG Sを連結子会社とすることで、当該目的の達成を加速させ、さらなるグループシナジー創出を目指すことといたしました。

③ 企業結合日

2018年6月26日（現金を対価とする株式取得日）

2018年6月30日（みなし取得日）

④ 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

⑤ 結合後企業の名称

田中産業株式会社 株式会社MG S

⑥ 取得した議決権比率

(田中産業)

取得直前に所有していた議決権比率	29.11%
企業結合日に取得した議決権比率	26.90%
取得後の議決権比率	56.01%

(MGS)

取得直前に所有していた議決権比率	43.52%	(内間接所有23.20%)
企業結合日に取得した議決権比率	21.43%	(内間接所有21.43%)
取得後の議決権比率	64.95%	(内間接所有44.63%)

⑦ 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が田中産業の議決権の56.01%を取得したものであり、当社を取得企業としております。

(2) 連結財務諸表に含まれる被取得企業の業績の期間

2018年6月30日をみなし取得日としているため、2018年7月1日から2018年12月31日までの業績が連結財務諸表に含まれております。なお、田中産業及びMGSは持分法適用関連会社であったため、2018年1月1日から2018年6月30日までの業績は、持分法による投資利益として計上しております。

(3) 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金による株式取得の対価	959百万円
取得原価		959百万円

(4) 被取得企業の取得原価と取得するに至った取引ごとの取得原価の合計額との差額

(田中産業) 段階取得に係る差損	145百万円
(MGS) 段階取得に係る差損	24百万円

(5) 発生したのれん及び負ののれん発生益の金額及び発生原因

(田中産業)

- ① 負ののれん発生益の金額
271百万円
- ② 発生原因
企業結合時の時価純資産が取得価額を上回ったためであります。

(MGS)

- ① 発生したのれんの金額
0百万円
- ② 発生原因
今後の事業展開によって期待される将来の収益力から発生したものであります。
- ③ 償却方法及び償却期間
のれんの金額に重要性が乏しいため、当連結会計年度内に一括で費用処理しております。

(6) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債

(田中産業)		(MGS)	
流動資産	2,425百万円	流動資産	1,085百万円
固定資産	4,327百万円	固定資産	562百万円
資産合計	6,752百万円	資産合計	1,648百万円
流動負債	3,215百万円	流動負債	808百万円
固定負債	1,340百万円	固定負債	490百万円
負債合計	4,555百万円	負債合計	1,299百万円

- (7) 企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

売上高	2,774百万円
営業利益	226
経常利益	191
親会社株主に帰属する当期純利益	80

(概算額の算定方法)

企業結合が連結会計年度開始の日に完了したと仮定し、2018年1月1日から2018年6月30日の被取得企業の損益計算書を基礎として当社が算定した売上高及び損益情報と、当社が当連結会計年度に計上している持分法による投資損益等を調整し影響額の概算としております。また、企業結合時に認識されたのれんについては、当連結会計年度内に一括で費用処理しております。

なお、当該注記は監査証明を受けておりません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

①定期借地契約に伴う原状回復義務等に関する資産除去債務

イ 当該資産除去債務の概要

当社の賃貸不動産の一部において、定期借地契約に伴う原状回復義務等に関して資産除去債務を計上しております。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

原状回復義務に関しては、使用見込期間を当該資産の耐用年数の未経過年数相当と見積り、割引率1.5～2.0%を使用して資産除去債務の金額を算定しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
期首残高	29百万円	83百万円
新規連結子会社の取得に伴う増加額	52	11
時の経過による調整額	0	2
期末残高	83	98

②不動産賃貸借契約による原状回復義務に関する資産除去債務

イ 当該資産除去債務の概要

事業所等の建物賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る義務を資産除去債務として認識しておりますが、当該資産除去債務に関しては、資産除去債務の負債計上に代えて、建物賃貸借契約に関する敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、そのうち当連結会計年度の負担に属する金額を費用に計上する方法によっております。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

平均使用見込期間を入居より15年と見積り、敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を算定しております。

ハ 敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額の増減

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
期首残高	50百万円	52百万円
新規連結子会社の取得に伴う増加額	—	21
時の経過による調整額	4	4
資産除去債務の履行による減少額	△1	△2
期末残高	52	77

(賃貸等不動産関係)

当社及び一部の連結子会社では、東京都その他の地域において、賃貸用の不動産（土地・建物等）を有しております。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は164百万円（収益は売上高に、賃貸費用は売上原価に計上）しております。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

なお、当連結会期年度において賃貸等不動産の重要性が増したため、当連結会期年度より記載しております。

(単位：百万円)

		当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
連結貸借対照表計上額		
	期首残高	1,450
	期中増減額	2,210
	期末残高	3,660
期末時価		2,223

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。
2. 期中増減額のうち、主な増加額は不動産取得（2,227百万円）であり、主な減少額は減価償却費（20百万円）であります。
3. 当連結会計年度末の時価は、主要な物件については社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価書に基づく金額であります。ただし、取得時や直近の評価時点から、一定の評価額や適切に市場価格を反映していると考えられる指標に重要な変動が生じていない場合には、当該評価額や指標を用いて調整した金額によっております。その他の物件については、路線価等の指標に基づいて自社で算定した金額であります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービス区分の外部顧客に対する売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客に対する売上高に区分した金額が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、地域ごとの売上高の記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、地域ごとの有形固定資産の記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客に対する売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービス区分の外部顧客に対する売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客に対する売上高に区分した金額が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、地域ごとの売上高の記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、地域ごとの有形固定資産の記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客に対する売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当社企業グループは、クリエイティブサービス事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の関連会社等

前連結会計年度（自2017年1月1日 至2017年12月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有（被所有） 割合（％）	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
関連会社	田中産業株式会社	埼玉県さいたま市	80	クリエイティブサービス業	(所有) 直接 29.1	土地の購入	土地の購入	313	－	－

(注) 1. 取引金額には消費税等は含まれておりません。

2. 土地の購入価格については、不動産鑑定士の鑑定価格にて取引を行っております

当連結会計年度（自2018年1月1日 至2018年12月31日）

該当事項はありません。

(イ) 連結財務諸表提出会社の役員等

前連結会計年度（自2017年1月1日 至2017年12月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有（被所有） 割合（％）	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員の近親者	鈴木 隆夫	－	－	－	－	取締役鈴木隆一の実父	上場会社株式の取得	190	－	－

(注) 1. 取引金額には消費税等は含まれておりません。

2. 当社と株式会社ウイルコホールディングスとの資本提携に伴い、鈴木隆夫氏より当該上場株式（1銘柄）を取得いたしました。なお、証券取引所の時間外取引により、取引実行日の前日の終値にて取引を行っております。

当連結会計年度（自2018年1月1日 至2018年12月31日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有（被所有） 割合（％）	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員の近親者	林 健二	－	－	－	－	当社取締役会長の近親者	自己株式の取得(注)	1,105	－	－

(注) 2018年2月20日開催の取締役会決議に基づき、2018年2月21日に東京証券取引所の自己株式立会外取引（ToSTNeT-

3）を利用し、2018年2月20日の株価終値にて取引を行っております。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
1株当たり純資産額 922円01銭 1株当たり当期純利益 110円34銭 なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については潜在株式が存在しないため記載しておりません。	1株当たり純資産額 792円23銭 1株当たり当期純損失(△) △75円38銭 なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(注) 1. 1株当たり純資産額並びに1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

2. 1株当たり純資産額

	前連結会計年度末 (2017年12月31日)	当連結会計年度末 (2018年12月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	12,674	10,973
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	27	1,063
(うち非支配株主持分)	(27)	(1,063)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	12,647	9,909
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(千株)	13,717	12,508

(注) 従業員持株会専用信託が保有する当社株式を、「1株当たり純資産額」の算定上、期末発行済株式総数から控除する自己株式に含めております(前連結会計年度100千株、当連結会計年度一千株)。

3. 1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失

	前連結会計年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当連結会計年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失(△)		
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)(百万円)	1,251	△959
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)(百万円)	1,251	△959
普通株式の期中平均株式数(千株)	11,339	12,734

(注) 従業員持株会専用信託が保有する当社株式を、「1株当たり当期利益又は1株当たり当期損失」の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております(前連結会計年度183千株、当連結会計年度22千株)。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	17,020	18,050	0.34%	—
1年以内に返済予定の長期借入金	1,480	1,717	0.28%	—
1年以内に返済予定のリース債務	12	9	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く)	8,276	7,500	0.24%	2020年1月1日～ 2027年9月30日
其他有利子負債	—	—	—	—
合計	26,789	27,277	—	—

(注) 1. 「平均利率」については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	1,200	1,200	1,200	900

【資産除去債務明細表】

本明細表に記載すべき事項が連結財務諸表規則第15条の23に規定する注記事項として記載されているため、資産除去債務明細表の記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	12,588	24,091	37,143	51,145
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前当期純損失(△) (百万円)	656	949	1,031	△246
親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△) (百万円)	339	591	547	△959
1株当たり四半期純利益又は1株当たり当期純損失(△) (円)	25.46	45.59	42.72	△75.38

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失(△) (円)	25.46	19.97	△3.50	△120.50

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,672	2,539
売掛金	9	18
前払費用	24	24
短期貸付金	(注) 12,367	(注) 12,587
その他	(注) 235	(注) 251
貸倒引当金	△225	△455
流動資産合計	15,083	14,966
固定資産		
有形固定資産		
建物	452	474
工具、器具及び備品	5	8
土地	1,347	3,525
有形固定資産合計	1,805	4,008
無形固定資産		
のれん	205	—
ソフトウェア	7	5
その他	0	0
無形固定資産合計	213	5
投資その他の資産		
投資有価証券	1,045	751
関係会社株式	24,549	24,430
その他	104	105
投資その他の資産合計	25,699	25,288
固定資産合計	27,719	29,302
資産合計	42,802	44,268

(単位：百万円)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
負債の部		
流動負債		
短期借入金	(注) 18,300	(注) 19,300
1年内返済予定の長期借入金	1,472	1,716
未払費用	36	44
未払法人税等	2	3
預り金	(注) 3,737	(注) 7,298
その他	46	53
流動負債合計	23,594	28,415
固定負債		
長期借入金	8,175	7,500
繰延税金負債	72	59
退職給付引当金	10	—
その他	302	44
固定負債合計	8,560	7,603
負債合計	32,155	36,019
純資産の部		
株主資本		
資本金	400	400
資本剰余金		
資本準備金	21	21
その他資本剰余金	8,989	9,016
資本剰余金合計	9,011	9,037
利益剰余金		
利益準備金	56	78
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	1,156	49
利益剰余金合計	1,212	127
自己株式	△40	△1,279
株主資本合計	10,583	8,285
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	63	△36
評価・換算差額等合計	63	△36
純資産合計	10,647	8,249
負債純資産合計	42,802	44,268

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高		
経営サポート料収入	492	537
関係会社受取配当金	1,328	975
不動産賃貸収入	3	215
売上高合計	(注)1 1,825	(注)1 1,727
売上原価	0	39
売上総利益	1,825	1,687
販売費及び一般管理費	(注)1, (注)2 831	(注)1, (注)2 1,183
営業利益	994	503
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	(注)1 42	(注)1 90
投資事業組合運用益	13	12
その他	(注)1 22	(注)1 23
営業外収益合計	78	126
営業外費用		
支払利息	(注)1 58	(注)1 100
支払手数料	195	—
貸倒引当金繰入額	225	230
その他	0	2
営業外費用合計	479	333
経常利益	593	297
特別利益		
負ののれん発生益	605	—
抱合せ株式消滅差益	84	—
投資有価証券売却益	4	31
特別利益合計	694	31
特別損失		
減損損失	—	41
関係会社株式評価損	363	1,127
その他	37	75
特別損失合計	401	1,243
税引前当期純利益又は税引前当期純損失 (△)	887	△915
法人税、住民税及び事業税	1	△139
法人税等調整額	35	—
法人税等合計	36	△139
当期純利益又は当期純損失 (△)	850	△776

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	400	21	7,226	7,248
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益				
自己株式の取得				
自己株式の処分			85	85
合併による増加			1,596	1,596
株式交換による増加			80	80
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	－	－	1,762	1,762
当期末残高	400	21	8,989	9,011

	株主資本		
	利益剰余金		
	利益準備金	その他利益剰余金	利益剰余金合計
		繰越利益剰余金	
当期首残高	28	602	631
当期変動額			
剰余金の配当	27	△296	△269
当期純利益		850	850
自己株式の取得			
自己株式の処分			
合併による増加			
株式交換による増加			
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			
当期変動額合計	27	553	581
当期末残高	56	1,156	1,212

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△702	7,576	1	1	7,578
当期変動額					
剰余金の配当		△269			△269
当期純利益		850			850
自己株式の取得	△279	△279			△279
自己株式の処分	226	311			311
合併による増加	478	2,074			2,074
株式交換による増加	237	318			318
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）		－	62	62	62
当期変動額合計	662	3,006	62	62	3,069
当期末残高	△40	10,583	63	63	10,647

当事業年度（自 2018年1月1日 至 2018年12月31日）

（単位：百万円）

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	400	21	8,989	9,011
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純損失（△）				
自己株式の取得				
自己株式の処分			26	26
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	－	－	26	26
当期末残高	400	21	9,016	9,037

	株主資本		
	利益剰余金		
	利益準備金	その他利益剰余金	利益剰余金合計
		繰越利益剰余金	
当期首残高	56	1,156	1,212
当期変動額			
剰余金の配当	21	△330	△308
当期純損失（△）		△776	△776
自己株式の取得			
自己株式の処分			
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			
当期変動額合計	21	△1,106	△1,084
当期末残高	78	49	127

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△40	10,583	63	63	10,647
当期変動額					
剰余金の配当		△308			△308
当期純損失（△）		△776			△776
自己株式の取得	△1,258	△1,258			△1,258
自己株式の処分	18	45			45
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）		－	△100	△100	△100
当期変動額合計	△1,239	△2,297	△100	△100	△2,398
当期末残高	△1,279	8,285	△36	△36	8,249

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

関係会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

①時価のあるもの

事業年度の末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理、売却原価は移動平均法により算定）

②時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに属する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な直近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。

ただし、建物並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりです。

建物 10年～36年

工具器具備品 3年～5年

また、取得金額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等償却する方法によっております。

(2) 無形固定資産

自社利用のソフトウェアは、利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

(3) のれんの償却方法及び償却期間

のれん償却については、発生の都度、子会社の実態に基づいて償却期間を見積り、2年で均等償却しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理しております

(表示方法の変更)

(損益計算書)

前事業年度において、「売上高」に含めておりました「経営サポート料収入」「関係会社受取配当金」「不動産賃貸収入」は金額的重要性が増したため、当事業年度より区分掲記することといたしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「売上高」1,825百万円は、「売上高」の「経営サポート料収入」492百万円、「関係会社受取配当金」1,328百万円、「不動産賃貸収入」3百万円として組み替えております。

前事業年度において、区分掲記しておりました「営業外収益」の「匿名組合投資利益」は、金額の重要性が低下したため、当事業年度においては「営業外収益」の「その他」に含めております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「匿名組合投資利益」に表示していた200百万円は、「その他」として組み替えております。

(追加情報)

1. 従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引

当社は、グループの従業員に対して中長期的な企業価値向上のインセンティブを付与すると同時に、福利厚生
の増進策として、持株会の拡充を通じて従業員の株式取得及び保有を促進することにより従業員の財産形成を支
援することを目的として、「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」(以下「本プラン」といいます。))を
導入、2012年1月30日付でE-Ship信託契約を締結し継続してまいりましたが、2018年4月10日にて、信託期間満
了となり終了いたしました。

(1) 取引の概要

本プランは、当社が信託銀行に従業員持株会専用信託(以下「従持信託」といいます。))を設定し、従持
信託は信託期間内で当社持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を一括取得し、その後は、従持信託か
ら当社持株会に当社株式の売却を継続的に行ってまいりました。

当社株式の取得及び処分については、当社が従持信託の債務を保証しているため、経済的実態を重視し、
当社と従持信託は一体であるとする会計処理をしております。

従いまして、従持信託が所有する当社株式や従持信託の資産及び負債並びに費用及び収益については、貸
借対照表及び損益計算書に含めて計上しております。

(2) 信託を通じて自社の株式を交付する取引に関する会計処理

「従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引に関する実務上の取扱い」(実務対応報告第30号
平成27年3月26日)第20項を適用し、従来採用していた方法を継続しております。

(3) 信託が保有する自社の株式に関する事項

本プランは、2018年4月10日にて、信託期間満了となり終了し、当事業年度末において従持信託が保有す
る当社株式はなくなりました。

また、従持信託が保有する当社株式の当事業年度における期中平均株式数は22千株であり、1株当たり情
報の算出上、控除する自己株式に含めております。

2. 当事業年度において、退職金制度を廃止いたしました。これに伴う退職給付制度終了損31百万円は特別損失
のその他に含めております。

(貸借対照表関係)

(注) 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示されたものを除く)

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
短期金銭債権	8,128百万円	12,612百万円
短期金銭債務	1,311	8,594

(損益計算書関係)

(注) 1. 関係会社との取引高は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
売上高	1,808百万円	1,599百万円
販売費及び一般管理費	30	84
営業取引以外の取引高	44	88

(注) 2. 販売費に属する費用のおおよその割合は当事業年度0%(前事業年度0%)、一般管理費に属する費用のおお
よその割合は当事業年度100%(前事業年度100%)であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年1月1日 至 2017年12月31日)	当事業年度 (自 2018年1月1日 至 2018年12月31日)
給与・賞与	224百万円	276百万円
役員報酬	96	131
福利厚生費	73	62
減価償却費	125	174
支払報酬	97	139

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式（当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式24,024百万円、関連会社株式406百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式23,335百万円、関連会社株式1,213百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価を記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金損金算入限度超過額	69百万円	139百万円
不動産取得税否認額	1	—
未払事業税	0	0
従業員持株会専用信託の残余財産分配金の損金算入額	48	—
関係会社株式評価損	434	773
投資有価証券評価損	2	21
その他有価証券評価差額金	—	21
長期未払金否認額	—	8
投資損失引当金	3	4
税務上の繰越欠損金	68	187
その他	3	0
繰延税金資産小計	631	1,157
評価性引当額	△631	△1,157
繰延税金資産合計	—	—
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△28	△14
企業結合に伴う時価評価差額	△44	△44
繰延税金負債合計	△72	△59
繰延税金負債の純額	△72	△59

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2017年12月31日)	当事業年度 (2018年12月31日)
法定実効税率	30.9%	税金等調整前当期純損失であるため、記載を省略しております。
(調整)		
交際費損金不算入額	0.2	
受取配当金益金不算入	△42.3	
住民税均等割	0.2	
のれん償却費	4.3	
負ののれん発生益	△21.1	
評価性引当額	34.7	
抱合株式消滅差益	△3.0	
使用税率差異	0.2	
その他	0.0	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	4.1	

(企業結合等関係)

「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」の中の(企業結合等関係)をご参照ください。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	452	50	—	28	474	127
	工具、器具及び備品	5	4	—	2	8	3
	土地	1,347	2,177	—	—	3,525	—
	計	1,805	2,232	—	30	4,008	130
無形固定資産	のれん	205	—	41 (41)	164	—	—
	ソフトウェア	7	—	—	2	5	6
	その他	0	—	—	—	0	—
	計	213	—	41 (41)	166	5	6

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

土地 板橋区舟渡

2,177

2. 「当期減少額」欄の()は内数で、減損損失計上額であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	225	230	—	455

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	—
剰余金の配当の基準日	3月31日 6月30日 9月30日 12月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	次の算式により1単元当たりの金額を算定し、これを買取った単元未満株式の数で按分した金額とする。 (算式) 1株当たりの買取価格に1単元の株式数を乗じた合計金額のうち100万円以下の金額につき 1.150% 100万円を超え500万円以下の金額につき 0.900% 500万円を超え1,000万円以下の金額につき 0.700% 1,000万円を超え3,000万円以下の金額につき 0.575% 3,000万円を超え5,000万円以下の金額につき 0.375% (円未満の端数を生じた場合には切り捨てる。) ただし、1単元あたりの算定金額が2,500円に満たない場合には、2,500円とする。
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。 ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載する方法により行います。 当社の公告掲載URLは次のとおりであります。 http://www.jcpg.co.jp/
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社の定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有していません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第3期）（自 2017年1月1日 至 2017年12月31日）2018年3月30日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年3月30日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第4期第1四半期）（自 2018年1月1日 至 2018年3月31日）2018年5月14日関東財務局長に提出

（第4期第2四半期）（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月14日関東財務局長に提出

（第4期第3四半期）（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月13日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年2月23日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号（主要株主の異動）に基づく臨時報告書であります。

2018年4月2日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

2018年6月26日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号（特定子会社の異動）に基づく臨時報告書であります。

2019年2月13日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）に基づく臨時報告書であります。

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間（自2018年2月1日 至2018年2月28日）2018年3月14日関東財務局長に提出

報告期間（自2018年4月1日 至2018年4月30日）2018年5月14日関東財務局長に提出

報告期間（自2018年5月1日 至2018年5月31日）2018年6月15日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年3月29日

株式会社日本創発グループ

取締役会 御中

PwCあらた有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 小沢 直靖

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 大橋 佳之

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社日本創発グループの2018年1月1日から2018年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社日本創発グループ及び連結子会社の2018年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社日本創発グループの2018年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社日本創発グループが2018年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年3月29日

株式会社日本創発グループ

取締役会 御中

P w C あらた有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 小沢 直靖
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 大橋 佳之
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社日本創発グループの2018年1月1日から2018年12月31日までの第4期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社日本創発グループの2018年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。